

北琉球奄美大島湯湾方言の名詞・代名詞複数形の機能と その通言語的な位置づけ

新 永 悠 人

弘前大学

【要旨】 本稿では湯湾方言（琉球諸語の1つである奄美語に属する）の複数形が持つ諸機能に注目し、それを世界の諸言語の複数形が持つ「特殊な機能」（Corbett 2000: 234）と比較・考察した。湯湾方言の複数標識は、簡単に言えば、日本語標準語の「たち」だけではなく、「など」に相当する機能も持っている。このような現象を通言語的な視点から整理するために、本稿では「意味地図」（semantic map）という方法論を用いた。その際、単数、双数、複数などのような「数の区分の意味」（number values）と、累加、連合、などの「数の区分以外の意味」（non-number values）を分けて捉えることによって、諸言語の複数形が持つ「特殊な機能」が意味地図上で比較考察できるようにした。その結果、従来の研究では区別されていなかった「集合的例示」と「選言的例示」の区別、および複数形が実質的に1人の対象を指す用法のうち、いわゆる「尊敬複数」（polite plural）とは異なる「否定的・単独的例示」の通言語的な価値を明らかにした*。

キーワード：連合複数、近似複数、複数形の数の区分以外の意味、意味地図

1. はじめに

本稿は奄美語湯湾方言の名詞・代名詞の複数形の意味を記述し、それを通じて通言語的な意味地図を提案することを目的とする。本稿の湯湾方言とは、奄美大島（鹿児島県）の宇検村の湯湾集落で話されている伝統的方言を指す。湯湾方言は琉球

* これまで筆者に湯湾方言を教えてくださいくださった方々、特に元田ツネコ氏、篠崎ミネ氏、山木ムツ氏、村野悦江氏、平里子氏、藤美代子氏、直三男也氏に心より御礼申し上げます。また、本研究は東京外国語大学 AA 研 LingDy 若手共同研究支援プログラム（2008–2009 年度）、JSPS 科研費（10J09531、24242014）、人間文化研究機構・国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の助成を受けている。本稿の内容に関しては、投稿前および修正再投稿の原稿を下地理則氏に、初回投稿以後の原稿を2名の匿名査読者、九州大学下地組有志、および小幡千陽氏に読んでいただき、各氏から非常に有益な助言と批判をいただいた。本稿の要旨・題目の英訳は David Iannucci 氏に確認していただいた。カーア語は John Peterson 氏、ハンガリー語は大島一氏、ブルシャスキー語は吉岡乾氏、マッセンレンブル語は山口真佐夫氏に必要事項を教えていただいた。本稿の考察は東京外国語大学 AA 研での「第10回文法研究ワークショップ」（2015年5月31日）の参加者との議論をさらに発展させたものである。同ワークショップの参加者（特に発表者の桐生和幸氏、齊藤美穂氏、重野裕美氏、平塚雄亮氏）に御礼申し上げます。最後に、査読後の本稿の修正は人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによるハワイ大学マノア校での客員研究員としての滞り期間に行った。同大学の受入教員の Shinichiro Fukuda 氏に記して感謝申し上げます。

諸語の1つである奄美語に属する（上村・須山 1993: 390；新永・石原・西岡 2014: 96-97）。

湯湾方言の代名詞または名詞の複数形は、2つ以上の構成員から成る集合を指せるだけでなく、実質的に1つの対象を指すこともできる。以下の(1a)と(1b)に湯湾方言の1人称代名詞複数形の例を示す¹。

(1) 湯湾方言の1人称代名詞複数形

a. 2名以上の構成員から成る集合を指す例

[文脈：聞き手に、昨日、友人2名と一緒に集まったかと聞かれたときの返事（聞き手は話し手の友人を把握している）。]

kinjo=o waa-kjo=o juraw-an-ti=doo.

昨日 =TOP 1-PL=TOP 集まる -NEG-SEQ=ASS

「昨日は私たちは集まらなかったよ。」

[作例/TM氏]

b. 実質的に1名の対象を指す例

[文脈：発話の場には90歳の話し手と59歳の聞き手のみがいる。近所の男性がカツオ漁をしていたらしいという情報を聞き手に伝えた直後に話し手が発した言葉。]

wa-n=na sij-an. waa-kjo=o sij-an=doo.

1-SG=TOP 知る -NEG 1-PL=TOP 知る -NEG=ASS

「私は知らない。私などは知らないよ。」

[自然談話/TM氏]

(1a) の *waa-kja*（語末の短母音の /a/ と後続の主題標識が融合すると語末は /o/ になる）は話し手とその友人2名という複数のメンバーからなる集合を指しており、一般的な1人称複数形の用法である。一方、(1b) の *waa-kja* には(1a)のような話し手以外のメンバーがいない。話し手は近所の男性がカツオ漁をしていたという伝聞情報を思い出して聞き手に伝えた直後に、話し手自身はその情報にあまり自信がないことを伝えている。この発話の場（あるいは文脈）においては話し手以外のメンバーを特定できないため、実質的に *waa-kja* は1人の対象を指している。この *waa-kja* が実質的には話し手1人を指示していることは、同じ(1b)において直前に単数形の *wa-n* 「私」を使ったほぼ同じ文を述べていることも傍証となる。

さて、本稿の目的は2つ存在する。1つ目は、上記の(1b)のような湯湾方言の「複数形」の機能に焦点を当てて、その詳細を記述することである。2つ目は、その機能が持つ通言語的な価値を論じることである。

¹ 本稿の湯湾方言のデータは筆者のフィールドワークから得られたものであり、自由訳の最後の角かっこは湯湾方言のデータの種類を示している。斜線の左側の「作例」は例文が発話可能かどうかを話し手に確認し、実際に発話してもらったものであることを示し、「自然談話」は例文が湯湾方言話者のモノログまたはダイアログから得られたことを示す。斜線の右側には話し手のイニシャルを示した。例文中の「-」は接辞境界、「=」は接語境界、「+」は複合語の語幹境界を示す。

まず2節で議論の前提（用語の定義および湯湾方言の概要）を示す。3節では通言語的に報告されている複数形の「特殊な用法」のうち湯湾方言の複数形に関わるものを考察し、具体例を示す。4節では意味地図（semantic map）を用いて複数形の特殊な用法の通言語的対照を行う。最後の5節で結論と今後の課題を述べる。

2. 議論の前提

2.1. 用語の定義

「単数」（singular）および「複数」（plural）という用語は指示対象の数（すなわち、意味）を指しているのか、そのような意味を表す語形（すなわち、形式）を指しているのかがしばしば曖昧である。そこで、本稿では、以下のように定義する。なお、本稿の「語幹」とは、語根に（0個以上の）派生接辞が付いたものを指す。従って、最小の語幹は語根となる（cf. Haspelmath and Sims 2010: 20–21）。

(2) 「単数」および「複数」という語を含む用語の本稿での定義

[意味] 単数： 指示対象が1つ

複数： 指示対象が2つ以上

[形式] 単数形： 単数を表せる語形（または単語と接語のまとまり）

複数形： 複数と累加，または，複数と連合を表せる語形（または単語と接語のまとまり）。「複数」と「累加」（または「複数」と「連合」）を分ける根拠については3.1節で述べる。

複数標識：（複数形において）複数を表す接辞または接語

（注記）単数と複数の両方表せる語形は、以下の基準に従う。

- A. 「文法数の対立の中和」（general number）が起こる語形は、形態的に無標な名詞（語幹）を単数形とする。
- B. 同じ語根を用いた上で、文法数を表す語形（または単語と接語のまとまり）が2つ（以上）ある場合、単数のみを表す語形（または単語と接語のまとまり）および上記Aの基準によって単数形と認められた形を単数形とし、それ以外を複数形とする。

上記のとおり、本稿の「複数（形）」はいわゆる「双数（形）」（dual）も含む。これは、「連合」などの機能²が双数形にも深く関与するため、双数形と（狭義の）複数形を一括して論じるためである。複数形の定義にある「累加」と「連合」とは集合の構成員間の関係性を表す。3.2節で詳述するが、簡略に言えば、「累加」は日本語の「女たち」のように、集合の構成員全てを名詞語幹（この場合は「女」）で指示できる関係を表す。一方、「連合」は花子とその友人を「花子たち」と表すように、集合の構成員全てを名詞語幹（この場合は「花子」）で指示できない関係を表す。

² 本稿では Haspelmath (2003: 212) に倣い、語彙論的意味と語用論的用法を区別しない広義の概念として「機能」（functions）という用語を採用する。

さらに、「注記」の「A」に述べた「文法数の対立の中和」(“general number”; Corbett 2000: 9-19)とは、当該言語の別の形式では表すことのできる文法数の違いが、当該形式においては表せない現象を指す。例えば、日本語標準語では「私」は常に単数を表し、「私たち」は常に複数を表すため、「たち」の有無によって単数と複数の違いを表すことができる。しかし、「犬が居る」と言った場合の「犬」は(「たち」をつけることによって複数のみを表すことは可能だが)「たち」をつけないことによって単数のみを表すことができない(例:「犬が一匹居る」も「犬がたくさん居る」も可能)。従って、この場合の「犬」という語形は文法数の対立が中和している(Corbett 2000: 14)。

なお、通言語的には文法数の諸機能は名詞以外にも標示され得るが(Corbett 2000: 191-195)、本稿では比較の便宜上、名詞・代名詞への標示に限定して考察する。

2.2. 湯湾方言の概要

類型論的に見た湯湾方言の形態統語的特徴は、ほぼ日本語標準語と同様である(動詞における膠着的形態法、主語・(目的語)・動詞の基本語順)。

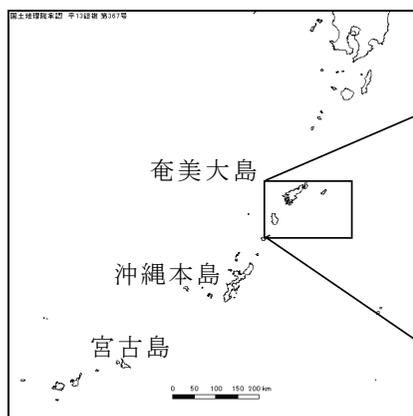


図1 琉球列島



図2 奄美大島周辺

ただし、母音音素は6つ (*/i, i, ə, a, o, u/*) で、子音音素は22個 (*/b, p, t, d, tʰ, k, g, kʰ, c, z, cʰ, s, h, m, mʰ, n, nʰ, r, w, wʰ, j, jʰ/*) 存在する。図1と図2(「白地図 KenMap (Ver 6.0)」で作成した地図画像を筆者が編集)に湯湾方言の話されている場所を示す。話し手は1917年(US), 1923年(TM), 1935年(YM), 1938年(ST)生まれの湯湾方言の話し手である。アルファベットはそれぞれの話し手(全て女性)の氏名のイニシャルであり、本稿の湯湾方言の例文末尾に情報として示す。

湯湾方言の複数標識は *-kja*, *-taa*, *=nkja* の3種がある (*-kja* と *=nkja* は共時的には別形態素である; 新永 2016)。これらは (3) のように直前に来る名詞・代名詞

の種類に応じて使い分けられる。=*nkja* は、*-kja* または *-taa* の後に続く場合がある。*-kja* と *-kja=nkja* に文法的機能の差異は見られず、*-taa* と *-ta=nkja* にも文法的機能の差異は見られない。ただし、*-kja=nkja* は使用頻度が少なく、*-ta=nkja* は多い。1・2 人称代名詞、疑問代名詞、指示代名詞の例を (4) に示した。

(3) 湯湾方言の複数標識と、直前に来る名詞・代名詞の種類

| | |
|---------------------------------|--------------|
| 直前に来る名詞・代名詞 | 複数標識 |
| 1 人称・2 人称代名詞 | <i>-kja</i> |
| (人を指す) 疑問代名詞, (人を指す) 指示代名詞, 呼称詞 | <i>-taa</i> |
| それ以外の名詞・代名詞 | <i>=nkja</i> |

(4) 湯湾方言の代名詞の文法数の体系

| | | | |
|--------------|-------------|-----------------|------------------|
| a. 人称代名詞 | 単数形 | 双数形 | 複数形 |
| 1 人称 | <i>wa-n</i> | <i>wa-ttəə</i> | <i>waa-kja</i> |
| 2 人称 (目上) | <i>na-n</i> | <i>na-ttəə</i> | <i>naa-kja</i> |
| 2 人称 (同輩以下) | <i>ura</i> | <i>ura-ttəə</i> | <i>ura-kja</i> |
| b. 疑問代名詞 | 単数形 (人) | 複数形 (人) | |
| 「誰」 | <i>taru</i> | <i>tat-taa</i> | |
| c. 指示代名詞 | 単数形 (人・物) | 複数形 (人) | 複数形 (物) |
| 近称 (話し手の領域) | <i>kuri</i> | <i>kut-taa</i> | <i>kuri=nkja</i> |
| 中称 (聞き手の領域) | <i>uri</i> | <i>ut-taa</i> | <i>uri=nkja</i> |
| 遠称 (それ以外の領域) | <i>ari</i> | <i>at-taa</i> | <i>ari=nkja</i> |

(3) にある「呼称詞」とは呼びかけに使える名詞を指し、人名 (例: *mijozu* 「ミヨジ」), 年上の親族名詞の大部分 (例: *anmaa* 「母さん」), 役職名 (例: *soncjoo* 「村長」) を指す。呼称詞の複数標識には必ず *-taa* を用いる (例: *mijozu-taa* 「ミヨジたち」, *anma-taa* 「母さんたち」, *soncjoo-taa* 「村長たち」)。

上記以外の名詞・代名詞はすべて、複数標識には *=nkja* を用いる (例: *warabi=nkja* 「子供たち」, *nusi=nkja* 「自分たち」)。

3. 通言語的な複数形の機能と湯湾方言の複数形の機能

3.1. 複数形の表す「数の区分以外の意味」

複数形の特殊な機能についての報告は数多く存在する (Jespersen 1954[1911]: 83–85; Comrie 1975: 406; Corbett 2000: 219–242; Moravcsik 2003; Peterson 2014: 92; Armoskaite and Kutlu 2014: 271–272; 上林 2017: 66–69 など)。しかし、文法数と言えば、単数 (singular), 双数 (dual), 複数 (plural) のような「数の区分を表す意味」 (“number values”; Corbett 2000: 19–38) が議論の俎上に乗りにやすいため、数の区分以外の意味は「特殊な用法」 (“special uses”; Corbett 2000: 234) として周道的に扱われるか、各言語の記述に断片的に言及される場合がほとんどである。

本稿は、さまざまな言語における報告例の中から、特に湯湾方言との比較におい

て互いに意味的・形式的な関連が強い複数形の特殊な用法を「複数形の数の区分以外の意味」(non-number values of plural forms)として捉え直し、その通言語的な特徴を明らかにすることを旨とする。本稿の考察の対象は以下の6つの機能である。

(5) 通言語的に複数形が表す「数の区分以外の意味」

- a. 累加 (additive)
- b. 連合 (associative)
- c. 集合的例示 (group exemplar)
- d. 否定的 or 単独的例示 (negative or solo exemplar)
- e. 選言的例示 (disjunctive exemplar)
- f. 尊敬 (honorific)

上記6種の意味の具体的説明は3.2節以降で述べることにし、ここでは、上記の意味を「数の区分以外の意味」として捉えるうえで重要な Corbett and Mithun (1996) について簡潔に述べる。

まず、日本語標準語で「よしこたち」と言う場合には、「よしこ」という名前の人が2名以上いる場合((5a)の「累加」にあたる)と、「よしこ」という名前の人は1名だけでそれ以外は別の名前の場合((5b)の「連合」にあたる)の2通りがある (cf. Iwasaki 2013: 57)。本稿では、前者の機能を「累加複数」、後者の機能を「連合複数」と呼ぶことにする。日本語標準語ではどちらの場合も「たち」という同一の複数標識を用いるが、他の言語を見ると、異なる複数標識を用いる言語もある(詳しくは3.2節)。一見すると、連合複数には「数の区分の意味(number values)」,特に、「複数(plural)」の一種として捉えることができそうである (Corbett and Mithun 1996: 7)。しかし、連合複数という概念は「連合」(associative)と「複数」(plural)という異なる2つの概念の組み合わせであり、このうち「連合」は「数の区分の意味」から除外すべきであると述べたのが Corbett and Mithun (1996: 5-13)である。その根拠として、彼らは中央アラスカユピック語の以下のデータを挙げている(語例の形態素分析は同書12頁のもので、グロスと自由訳は同書11-12頁の例文から採った)。

(6) 中央アラスカユピック語 (Corbett and Mithun 1996: 12)

| | 累加複数 | 連合複数 |
|----|---|---|
| 双数 | <i>qaya-k</i> カヤック -DU 「2つのカヤック (小舟)」 | <i>cuna-nku-k</i> PN-ASSC-DU 「 <i>cuna</i> (個人名) とその友人」 |
| 複数 | <i>qaya-t</i> カヤック -PL 「3つ以上のカヤック (小舟)」 | <i>cuna-nku-t</i> PN-ASSC-PL 「 <i>cuna</i> (個人名) とその家族」 |

上記のデータから、*-k*は双数を、*-t*は複数を、*-nku*は連合を表していることが分かる。すなわち、連合という機能が双数や複数という「数の区分の意味」と分けることが

できるということを形式的に証明する言語があったということである。

さらに, Corbett and Mithun (1996) は言明していないが, (6) のデータは *qaya-Ø-k* (カヤック - 累加 -DU), *qaya-Ø-t* (カヤック - 累加 -PL) のように「累加」を表すゼロ形態素 (-Ø) を分析し得ることが (言い換えれば, 双数の *-k* や複数の *-t* に「累加」の意味が含まれていないことが) 暗黙の前提になっている。

上記のように「累加複数」と「連合複数」を, 「累加」と「連合」という「数の区分の以外の意味」と, 「複数」という「数の区分の意味」に分けて捉えることの利点とは何だろうか? それは, 「累加」と「連合」を, 他の「特殊な用法」として報告されてきた複数形の諸機能と同一のレベルで論じることを可能にすることである (なお, 「数の区分の意味」とは異なる次元で「累加」の機能とそれ以外の機能を対比するという発想の萌芽は Daniel 2005: 8-13 にもある)。詳細は 4.2 節で考察する。

(5) に示した諸機能のうち, (5a-b) の「累加」と「連合」は文法数の複数に関する考察では必ず言及される基本概念である。また, 複数形の特殊な機能として, (5f) の「尊敬」も有名である。一方, (5c, e) の「集合的例示」と「選言的例示」は通言語的に報告が少なく, たいてい同じものとして扱われ, その実態が不明である。さらに, 類型論的な視点において (5d) の「否定的 or 単独的例示」を考察したのは本稿が最初である (ただし, 萌芽的な研究は新永 2013: 46-48 にある)。

以下の節では, まず 3.2 節で複数形の機能として基本的な「累加」と「連合」を概説し, 3.3 節で「集合的例示」と「選言的例示」を詳細に比較考察する。続く 3.4 節では複数形が (実質的に) 1 つの対象を指示するという点で共通する「尊敬」と「否定的 or 単独的例示」を比較考察する。最後の 3.5 節でそれらの機能をまとめる。

3.2. 累加と連合

3.2.1. 累加と連合の違い

「複数形」と言えば, まずは英語の *horse-s* (馬 -PL) のように同質な対象が複数存在する (厳密には, 複数形が指示する集合の構成員すべてを, 対応する単数形によって指示できる) 例が想起されやすい。つまり, 「馬₁ + 馬₂ + 馬₃ + …」のような複数である。それゆえ, このような複数には “normal plural” (Jespersen 1954[1911]: 73) や “ordinary plural” (Corbett and Mithun 1996: 1) という呼ばれ方が存在する。本稿ではこのような複数を「累加複数」(additive plural; Daniel 2005: 12) と呼ぶことにする。

しかし, 複数形の指示対象には同質な構成員による集合だけではなく異質な構成員による集合もあることは古くから知られている (Edgerton 1909: 110, Jespersen 1954[1911]: 70 など)。例えば, ハンガリー語には *-ok* と *-ék* という 2 つの複数標識があり, 前者は累加複数を, 後者は連合複数 (associative plural) を表す (Corbett and Mithun 1996: 5)。具体的には, *János-ok* であれば *János* という名前の人が複数居ることを表し, *János-ék* であれば, *János* とそれ以外の人 (典型的には, 家族または

友人)が居ることを表す。連合複数においては、名詞語幹・代名詞語幹の指示対象と集合内の他の構成員はどちらも(聞き手がそれらを同定できるという意味で)定(definite)であり、両者は互いに何らかの強い関係(親族関係や友人関係など)で結ばれている(Moravcsik 2003: 473)。また、原則としてその指示対象は人間である(同書同頁)。

さて、連合の指示対象となる集合は定(definite)であると述べた。しかし、先行研究には、指示対象が不定(indefinite)の場合にも“associative plural”が使用できるとの分析がある。例えば、Nakanishi and Tomioka (2004: 128)は「公園で歌っていた女の子たちの中には、男の子も2、3人混ざっていた」、Hosoi (2005: 160)は「男の子たちが公園で野球をしていた。彼らのうち2人は女の子だった」という例を挙げ、それぞれの「女の子たち」、「男の子たち」は“associative plural”であるとしている(下線引用者: 原文のローマ字表記を漢字・仮名表記にした)。これらの例は、確かに集合の構成員が同質ではないという点において先のハンガリー語の *János-ék* との共通点を持つ。しかし、Nakanishi and Tomioka (2004: 125)と Hosoi (2005: 160)が既に指摘しているように、上記の例で「たち」が使えるためには、名詞語幹の指示対象が集合の多数を占める必要がある(「多数派制約」と仮に呼ぶ)。例えば、子どもたち10人の集団の中に女の子が1人しかいない場合(残りの9人は全員男の子の場合)に「女の子たちが遊んでいた」とは言うことはできない³。しかし、ハンガリー語の *-ék* にはそのような制約はない。そこに1人 *János* が居れば、*János* 以外の構成員が何名であろうとも *János-ék* と言うことができる(大島一私信 2019年4月23日)⁴。上記の日本語標準語の例は、「集合の構成員がほとんど同じ」という点に注目するならば「累加複数」に近い側面がある。本稿では、上記の「多数派制約」を持つ日本語標準語の「たち」の用法は「連合」と「累加」の境界領域に存在する(複数形の)非典型的な用法と見なし、「連合」の定義は依然として「名詞語幹または代名詞語幹の指示対象およびその集合は定」とする。

本稿では、3.1節で示した中央アラスカユピック語に関する議論を踏まえ、「累加」と「連合」を「複数」とは別の機能として考察を進めて行く。ただし、中央アラスカユピック語以外の実際の各言語の形態素においては累加と複数、あるいは連合と複数は同一の形態素によって表されるため、(5)に示した諸機能同士の比較を意図する場合は「累加」または「連合」を、個々の言語形式の機能を明示的に指す場合

³ この日本語標準語の文法性の判断は、Nakanishi and Tomioka (2004: 125)と Hosoi (2005: 160)の記述、および筆者(1983年生まれ、男性、神奈川県相模原市生まれ育ち)に基づく。

⁴ ちなみに、Nakanishi and Tomioka (2004: 125)は「多数派制約」が働かない例として「(地球上の自国以外の領地がすべて火星人に制圧されたうえで、火星人に征服された大多数の地球人とそれを統率する少数の火星から成る大部隊が攻めてきたときに)火星인들이攻めてきた」が言えると述べている。しかし、このような文脈での「火星人」およびそれに統率された大部隊は定であるため、通常の「連合複数」とみることができる。

は「累加複数」または「連合複数」という用語を使用する⁵。

3.2.2. 湯湾方言の累加と連合

まず、湯湾方言の複数標識 (*-kja*, *-taa*, *=nkja*) が累加複数を表す例を示す (以下、当該名詞句とその自由訳に下線を引く)。

(7) 湯湾方言の累加複数

a. *-kja* の例

[文脈：話し手より年下の3人の聞き手に対して話しかけている。]

kinujo. sato. ude. mijo. ura-kja=n maxin wudur-oo. dii. dii.
 PN PN ほら PN 2.NHON-PL=も一緒に踊る -VOL さあ さあ
 「キヌヨ。サト。ほら。ミヨ。お前たちも一緒に踊ろう。さあ。さあ。」

[作例/YM氏]

b. *-taa* の例

[文脈：長生きしている人が周囲にどれだけいるかを話し合っている。]

naa kjuu+zjuu+ama-i=nu tusikato=o, tat-taa=ga umoo-jur-u?
 もう九+十+余る -INF=GEN お年寄り=TOP 誰 -PL=FOC 居る .HON-UMRK⁶-PFOC
 「もう九十歳以上のお年寄りは誰がいらっしゃる？」 [自然談話/US氏]

c. *=nkja* の例

[文脈：遠くで子供が4, 5人遊んでいる。]

an warabi=nkjo=o daa=ra cji=kai.
 あの 子供 =PL=TOP どこ =ABL 来る .SEQ=DUB
 「あの子供たちはどこから来たのかな。」 [作例/YM氏]

(7a) の *ura-kja* は (同輩以下の) 聞き手のみが複数存在する状況で使用されている。(7b) の *tat-taa* は疑問の対象(人間)のみが複数存在する状況で使用されている。(7c) の *an warabi=nkja* (後続の主題標識との融合で *=nkjo* になっている) は子供のみが複数存在する状況で使用されている。

次に、湯湾方言の複数標識が連合複数を表す例を示す。

(8) 湯湾方言の連合複数

a. *-kja* の例

⁵ なお、本稿では「連合複数」(associative plural) という用語を採用し、当該現象に対して先行研究で多用されている「近似複数」(plural of approximation) という用語 (風間 2003: 252, 山越 2003: 138-139, 下地 2006: 94, イェスベルセン 2006: 184, 重野・白田 2016: 113) を避けた。その理由は、近年の研究では「連合」以外の意味にも “approximative” という用語を使用する研究が存在するためである。詳しくは 3.3.1 を参照されたい。

⁶ 動詞接辞 *-jur* は能動態, 肯定, 非進行相, 非丁寧の諸機能を表し、一部の語末接辞が義務的に要求する接辞のグループに含まれる。これらの機能を一括するラベルとして、グロスは「無標」(unmarked) とした。

[文脈：話し手は友人2人と交通事故を目撃した。周囲の人は救急車を呼んだりしていたが、話し手と友人2人はただ見ているだけだった。後から別の友人に「君たち3人は何をしていたの?」と聞かれた場合の回答。]

waa-kjo=o mi-cji=du wu-tat=too=jaa.

1-PL=TOP 見る -SEQ=FOC PROG-PST=ASS=SOL

「私たちは見ているだけだったよ。」

[作例/YM氏]

b. *-taa* の例

[文脈：歌遊び（鳥唄を歌って楽しむ集まり）の日に（互いの友人である）サトとキヌヨが来ていたかどうかを尋ねられたときの返事。]

satoo-taa c²ju-tat=too.

PN-PL 来る .PROG-PST=ASS

「サトたち（が）来ていたよ。」

[作例/YM氏]

c. *=nkja* の例

[文脈：歌遊び（鳥唄を歌って楽しむ集まり）の日に聞き手の孫とその友人が来ていたかどうかを尋ねられたときの返事。]

waa maga=nkjo=o c²ju-tat=too.

1SG.ADNZ 孫 =PL=TOP 来る .PROG-PST=ASS

「私の孫たちは来ていたよ。」

[作例/YM氏]

(8a) の *waa-kja*（後続の主題標識との融合で *waa-kjo* になっている）は話し手とその友人を指している。(8b) の *satoo-taa* はサトとキヌヨの2人を指している。最後の(8c) の *waa maga=nkja*（後続の主題標識との融合で *=nkjo* になっている）は話し手の孫とその友人を指している。

最後に、「多数派制約」(3.2.1 節)に関わる湯湾方言の例を挙げる。

(9) 湯湾方言の「多数派制約」に関わる例

[文脈：集会所に男性10名と女性2名が居る。]

muraja=nan jinga=nkja=nu wu-ta.

集会所 =DAT 男 =PL=NOM 居る -PST

「集会所に男たちがいた。」

[作例/YM氏]

上記のように、名詞語幹(*jinga*「男」)の指示対象が集合の多数を占める場合であれば、そこに女性が少し混ざっていても、*jinga=nkja* でその集合を指すことができる。一方、例えば、男性1名と女性5名からなる集合の場合、それを *jinga=nkja* (男 =PL)「男たち」を用いて指すことはできない。

3.3. 集合的例示と選言的例示

3.3.1. 集合的例示と選言的例示の違い

本稿では「集合的例示」と「選言的例示」という概念(用語)を区別する。先

行研究では, “approximative (plural)” という用語が集合的例示を表すこともあれば (Plungian 1995: 11, Corbett 2000: 239–240), 選言的例示を表すこともある (Peterson 2014: 105–106)。あるいは, 集合的例示に該当するものを “associative plural” と呼ぶ研究もあれば (Genetti 2007: 99), “similative (plural)” と呼ぶ研究もある (Daniel and Moravcsik 2013, Armoskaite and Kutlu 2014)。集合的例示, 選言的例示とは何かを示すために, 以下に両者の具体例を示す。

まず, Plungian (1995) からドゴン語 (ニジェール・コンゴ語族; マリ共和国) の複数形が集合的例示を表す例を示す。比較のため, 同じ複数形が累加複数を表す例も併記する。同書はフランス語で書かれているため, フランス語のグロスと自由訳を日本語にする作業は筆者が行った (念のため元のフランス語の自由訳も添えた)。例文を引用する際のグロスは原則として引用元の表記を転載したが, 一部本稿の表記に統一したのものもある (なお, 本稿の引用文献内の原典は全て入手確認済み)。

(10) ドゴン語 (下線は引用者)

a. 集合的例示 (Plungian 1995: 11)

ibɛ ya-ɛ-w yɔ, isu mbe nie mbe barwiɛ-∅
 市場 行く -AOR-2SG もし 魚 PL 油 PL 買う -IMP.2SG
 「もし市場に行くのなら, 魚や油などを買いなさい。」 [Tembine 1986: 75]
 ('Si tu vas au marché, achète du poisson, de l'huile et cetera')

b. 累加複数 (Plungian 1995: 9)

ɛnɛ mbe
 ヤギ PL
 「ヤギたち」 ('chèvres')

上記の (10a) の *isu mbe nie mbe* (魚 PL 油 PL) は魚や油の量の多さ, あるいは種類の多さを表しているのではなく, 「魚や油とそれに類する何か」 ('du poisson, de l'huile et cetera') を指している (Plungian 1995: 11)。これは, 同じ複数標識の *mbe* を用いた (10b) の *ɛnɛ mbe* (ヤギ PL) が累加複数の「ヤギたち」 ('chèvres') を表しているのと対照的である。

次に, Peterson (2014) からキャリアー語 (オーストロアジア語族: インド北東部) の複数形が選言的例示を表す例を示す。こちらも比較のために, 累加複数を表す例を併記する。なお, 話者情報などの略号 (同書 78 頁の脚注 2) は省略する。

(11) カリヤー語 (下線は引用者)

a. 選言的例示 (Peterson 2014: 105)

de babu, amoʔd gujuŋ=na roʔ daʔ=ki uʔd
 well boy wash.face wash.feet=MID.IRR FOC water=PL drink

qoʔ=e=m *tay* *dukham sukham=na=pe.*

A:TEL=ACT.IRR=2SG then chat=MID.IRR=2PL

‘Well then, boy, wash your face and feet. Then you will drink water (or whatever) and then you will all have a chat.’ [Kerke[[ā 1990: 26]

b. 累加複数 (Peterson 2014: 85)

lebu=ki

man=PL

‘men’

上記の (11a) の *qaʔ=ki* (water=PL) は水の量 (や種類) の多さを表しているのではなく、「水またはそれに類するもの」(‘water (or whatever)’) を表している (Peterson 2014: 105)。一方, 同じ複数標識の *ki* を用いた (11b) の *lebu=ki* (man=PL) の例は, 累加複数の ‘men’ を表している。

さて, 上記の (10a) と (11a) の機能に対する先行研究の呼称はどちらも同じ “approximative (plural)” である (Plungian 1995: 11, Corbett 2000: 234, Peterson 2014: 92)。確かに, それぞれの例文の訳も, 前者が「and」(Plungian 1995: 11 ではフランス語で同じ意味の ‘et’) で, 後者が「or」を使用している点を除けば, 非常によく似ている。また, 両者がおそらくは実質的に名詞語幹の指示対象の上位概念 (前者のドゴン語の例ならば「食料品」, 後者のキャリアー語の例ならば「飲み物」) を指している点も共通していると思われる。

しかし, 両者には大きな相違点がある。それは, 前者は「魚 and 油 and 何か」というように集合の構成員同士の関係が連結的 (conjunctive) である一方で, 後者は「水 or 何か」というように集合の構成員同士の関係が選言的 (disjunctive) であるという点である。後者が選言的であることは, Peterson (2014: 106) の以下の記述からも分かる (斜体は原文; 下線は引用者)。

(T)he focal referent [名詞語幹の指示対象; 引用者注] is only an approximative value and the entity itself could *either* be the focal referent *or* one of the would-be associates, i.e. the other candidates for referencehood, but not both.

すなわち, 最終的に指示される実体自体 (‘the entity itself’) は名詞語幹の指示対象でもそれ以外の候補でも構わないが, 両方であることはない。

さらに, キャリアー語の選言的例示の例 ((11a) の *qaʔ=ki*) について, Peterson (2014: 105-106) が以下のように述べていることも重要である (下線は引用者)。

To begin with, the approximative plural refers to an undefined referent in the sense that while the existence of a particular referent is assumed, its exact identity is underspecified, and only an approximate value is given.

すなわち、(11a) のような場合、指示対象の存在自体は想定されているが、それが何であるかは確定していないのである。一方で、(10a) のドゴン語の例は Plungian (1995: 11) の ‘et cetera’ (Corbett 2000: 239 の英訳では ‘and similar things’) という訳から判断すると、少なくとも名詞語幹の指示対象である「魚」や「油」は購入品として確定しており、確定していないのはそれ以外のものだと考えられる。

ここで注意すべきは、「and の関係」(連結的)であるならば、指示対象は必ず(複数の構成員からなる)集合となり、一方の「or の関係」(選言的)であるならば、指示対象は必ずしも(複数の構成員からなる)集合を表さないといい点である⁷。

上記の考察を踏まえると、(10a) のドゴン語の *mbe* が表す集合的例示と、(11a) のキャリアー語の *ki* が表す選言的例示の間には以下の3つの違いを指摘できる。

(12) 集合的例示と選言的例示の違い

| | 集合的例示 | 選言的例示 |
|-----------------------------|---------|--------|
| a. 想定する集合内の構成員同士の関係 | and の関係 | or の関係 |
| b. 結果的に指示する対象は必ず複数である | ○ | × |
| c. 名詞語幹の指示対象は集合の構成員として優先される | ○ | × |

上記の区別は、日本語標準語と湯湾方言の当該形式を考察する際に非常に重要となる。以下の節で、それぞれの例を見て行く。

3.3.2. 日本語標準語の集合的例示と選言的例示

日本語標準語の「など」(「なんか」)は集合的例示を表す。一方、「(代)名詞 = か 疑問詞 = か」は選言的例示のみを表す。以下に例を挙げる(「#」は当該文脈では例文が使えないことを示す)。

(13) 日本語標準語の集合的例示と選言的例示

a. 集合的例示を表す「など」

[文脈：動物が10頭ぐらい居た。1頭がヤギであることは確実に分かった。]

1. ヤギなどが居た。
2. #ヤギかなんかが居た。

b. 選言的例示を表す「(代)名詞 = か 疑問詞 = か」

⁷ここで「必ずしも」と述べたのは、ブルシャスキー語において“echo-formation”と(累加複数を表す)複数標識の両者が同時に使われた場合、選言的例示であっても最終的に複数の構成員から成る集合を指示することができるためである。具体例は、*bépay-iso sépay-iso* (ヤク-PL ECHO-PL)「ヤクのような動物の複数、ヤクの複数を含んだ雑多な動物の群れ、ヤクを含んだ雑多な動物の群れ」である(吉岡乾 2016年3月9日私信)。1つ目の邦訳は選言的例示、残りの2つの邦訳は集合的例示にあたる。前者(「ヤクのような動物の複数」)はecho-formationが「ヤクのような動物」という選言的例示を、*-iso* (PL)が累加を表すことで、結果的に選言的例示でありつつも複数の構成員から成る集合を指していると考えられる。ちなみに、日本語標準語の選言的例示でも名詞語幹が文法数の中和を起こす場合には最終的な指示対象が複数の対象から成る集合を指す場合があり得る(例：「犬か何かがたくさん居た」)。

[文脈：遠くに動物が1頭居たが、はっきりとは見えなかった。]

1. [#]ヤギなどが居た。

2. ヤギかなんかが居た。

まず、(13a)は10頭ほどの動物の中で、確実に1頭はヤギだと分かっている状況を指す。その場合、「ヤギなどが居た」と言うことは可能だが、(1頭はヤギだと分かっている以上)「ヤギかなんかが居た」と言うことはできない。一方、(13b)では動物は1頭だけだが、はっきりとは視認できていない。その場合、日本語標準語では「ヤギかなんかが居た」とは言えるが、(その動物をはっきりと確定できていない以上)「ヤギなどが居た」とは言えない。

上記のとおり、「など」は(想定する集合内の)構成員同士の関係が「andの関係」で、結果的に指示する集合は必ず複数の構成員を含み、名詞語幹の指示対象は集合の構成員として優先される。一方、「(代)名詞=か疑問詞=か」は(想定する集合内の)構成員同士の関係が「orの関係」であり、結果的に指示する集合は複数の構成員を必ずしも含まず、名詞語幹の指示対象は集合の構成員として優先されない。従って、「など」と「(代)名詞=か疑問詞=か」は(12)で示した集合的例示と選言的例示の違いに対応している。

3.3.3. 湯湾方言の集合的例示と選言的例示

湯湾方言の複数標識 (-*kja*, -*taa*, =*nkja*)は集合的例示にも使用可能である。以下にその例を示す。

(14) 湯湾方言の集合的例示

a. 人称代名詞の後に -*kja* が続く

[文脈：写真に10人ぐらいが写っていて、1人は聞き手だったが、他の人は誰かよく分からなかった。これを後で(その写真を見ていない)聞き手に伝える。]

naa-kja=ga nu-ti moo-cju-tat=too=jaa.

2HON-PL=NOM 載る -SEQ HON-PROG-PST=ASS=SOL

「あなたなどが載っていなさったよ。」

[作例/ST氏]

b. 呼称詞(人名)の後に -*taa* が続く

[文脈：集会所に10人ぐらいが居て、1人はアキラだったが、他の人は誰かよく分からなかった。これを後で(その場に居なかった)聞き手に伝える。]

akira-taa=ga wu-tat=too=jaa.

PN-PL=NOM 居る -PST=ASS=SOL

「アキラなどが居たよ。」

[作例/ST氏]

c. 普通名詞(動物)の後に =*nkja* が続く

[文脈：柵の中に動物が10頭ぐらい居て、1頭はヤギだと分かったが、他の動物はよく分からなかった。これを後で(その場に居なかった)聞き手に伝

える。]

ama=nan=nja *hinzja=nkja=nu* *wu-tat=too=jaa.*
あそこ =LOC=TOP ヤギ =PL=NOM 居る -PST=ASS=SOL

「あそこにはヤギなどが居たよ。」 [作例/ST氏]

一方、湯湾方言の「(代)名詞 =*gajaaroo* 疑問詞 =*gajaaroo*」は選言的例示を示す。

(15) 湯湾方言の選言的例示

a. 人称代名詞 =*gajaaroo* 疑問詞 =*gajaaroo*

[文脈: 写真に1人だけ写っている。聞き手に似ているように見えたが、よく分からなかった。これを後で(その写真を見ていない)聞き手に伝える。]

na-n=gajaaroo *taru=gajaaroo* *wu-ta-n=mun,* *wakar-an-ta.*
2.HON-SG=DUB 誰 =DUB 居る -PST-PTCP=ADVRS 分かる -NEG-PST

「あなたか誰か居たけれど、分からなかった。」 [作例/ST氏]

b. 呼称詞(人名) =*gajaaroo* 疑問詞 =*gajaaroo*

[文脈: 遠くに人が1人だけ居るのが見えた。ミヨジのように見えるが、はっきりとは分からない。これを後で(その場に居なかった)聞き手に伝える。]

ama=nan *mijozu=gajaaroo* *taru=gajaaroo* *wu-ta-n=mun,*
あそこ =LOC PN=DUB 誰 =DUB 居る -PST-PTCP=ADVRS
wakar-an-ta=ga.

分かる -NEG-PST=CFM

「あそこにミヨジか誰か居たけど、(よく)分からなかった。」 [作例/ST氏]

c. 普通名詞(動物) =*gajaaroo* 疑問詞 =*gajaaroo*

[文脈: 遠くに動物が1頭居るのが見えた。ヤギのように見えるが、はっきりとは分からない。これを後で(その場に居なかった)聞き手に伝える。]

hinzjaa=gajaaroo *nuu=gajaaroo* *wu-ta-n=mun,* *wakar-an-ta.*
ヤギ =DUB 何 =DUB 居る -PST-PTCP=ADVRS 分かる -NEG-PST

「ヤギかなんか居たけど、(よく)分からなかった。」 [作例/ST氏]

先の(14a-c)は集合的例示の文脈である。よって、(14a-c)の *-kja*, *-taa*, *=nkja* を「(代)名詞 =*gajaaroo* 疑問詞 =*gajaaroo*」に置き換えることはできない。一方、(15a-c)は選言的例示の文脈であるため、このとき用いられる「(代)名詞 =*gajaaroo* 疑問詞 =*gajaaroo*」を *-kja*, *-taa*, *=nkja* に置き換えることはできない。

さて、集合的例示の機能を考える場合、選言的例示との違いだけではなく、連合複数との違いを見ることも重要である。以下の(16)に挙げる湯湾方言の集合的例示の例は、3.2.2節の(8)に示した湯湾方言の連合複数との違いを示している。

(16) 湯湾方言の集合的例示(連合との違いを示す例)

a. *-kja* の例

[文脈: 話し手は1人で散歩中に交通事故を目撃した。すぐに周囲には人だ

かりができた。話し手のそばにも茫然と事故を見ている人たちが居た（ただし、その人たちは知り合いではない）。後から友人に「そのときはどうだった？」と聞かれたときの返事。]

waa-kjo=o mi-cji=du wu-tat=too=jaa.

1-PL=TOP 見る -SEQ=FOC PROG-PST=ASS=SOL

「私などは見ているだけだったよ。」

[作例 /YM 氏]

b. *-taa* の例

[文脈：歌遊び（鳥唄を歌って楽しむ集まり）の日にサトが来ており、サト以外の人も来ていた。その後、聞き手に「歌遊びの日は人（の入り）はどうだった？」と聞かれたときの返事（注：サトは話し手と聞き手の友人；聞き手はサト以外の人と知り合いではない）。]

satoo-taa c'ju-tat=too.

PN-PL 来る .PROG-PST=ASS

「サトなど（が）来ていたよ。」

[作例 /YM 氏]

c. *=nkja* の例

[文脈：歌遊び（鳥唄を歌って楽しむ集まり）の日に話し手の孫が来ており、それ以外の人にも来ていた。その後、聞き手に「その日はどうだった？」と聞かれたときの返事（注：聞き手は話し手の孫以外の人と知り合いではない）。]

waa maga=nkja=n c'ju-tat=too=jaa.

1SG.ADNZ 孫 =PL= も 来る .PROG-PST=ASS=SOL

「私の孫なども来ていたよ。」

[作例 /YM 氏]

上記の (16a-c) の例文は (8a-c) の連合複数の例文とよく似ている。異なるのは文脈である。(16a-c) の例文では指示対象の集合が不定であるという点で、連合複数と異なる。例えば、(16a) の例文では話し手が 1 人で散歩中に事故を目撃しており、その後周囲に集まった人とは知り合いではない。ゆえに、話し手は聞き手にも周囲の人を特定する情報を伝えていない。このような状況は 3.2.2 節で述べた連合複数が使用される状況とは確実に異なる。実際、(16a-c) のように指示対象となる集合が不定の状況で日本語標準語の「たち」を使うことは不自然である（それゆえ、これらの例の日本語標準語訳には「など」を用いた）⁸。

⁸ 本稿の査読者の 1 人は (16a-c) の文脈において、日本語標準語の「『たち』を使用しても不自然ではない」との判断を筆者に伝えた（ただし査読者が言語形成期を過ごした地域は不明である）。さらに査読者は知人に対しても (16a-c) の文脈における日本語標準語の「たち」の使用の可否を確認し、「『たち』の使用が不自然だ」という回答、まったく自然だという回答がともに得られました」と述べている。従って、筆者以外の個人語においても、(16a-c) の文脈においては「たち」を使用できない話し手が存在することが分かった。ここで重要なことは、「同じ日本語」を話している者同士でも各個人語の文法性判断に違いがあるのは当然という事実である（どちらが「正しい日本語標準語」であるかを論じることは無意味である）。ここでは、筆者と査読者の文法性の判断の違いは、当該例文の適切性の問題として捉えるのではなく、個人語における「たち」の使用範囲の違いとして捉える（筆者の「たち」の使用

3.4. 尊敬と否定的・単独的例示

3.4.1. 尊敬と否定的・単独的例示との違い

複数形または集合的例示を表す形式が実質的に1つの対象を指す場合がある。それには、「尊敬」、「否定的例示」、「単独的例示」の3つがある。

通言語的に、複数形が実質的に1つの対象を指示する現象として有名なのは“polite plurals” (cf. Comrie 1975: 406, Corbett 2000: 220–228, Cysouw 2005 など) と呼ばれる現象である。通言語的に“polite plurals” と呼ばれる現象は以下の2つの特徴 (a, b) を同時に満たす。本稿ではこの特徴を「尊敬」という機能の定義とする。

(17) 本稿が対象とする「尊敬」の定義

- a. 複数形が本来持っていた数の区別の意味（「双数」や「複数」など）を失う。
- b. 指示対象または聞き手への敬意を示す。

例を以下に示す。語例の後の「>」は「尊敬」の機能を得た場合の人称・数の変化を示す（左側が変化前、右側が変化後）。

(18) 尊敬の機能を表す複数形

- a. カリアー語： *ijjar* (1人称双数除外 > 1人称単数・尊敬)；
ambar (2人称双数 > 2人称単数・尊敬)；
=kiyar (3人称双数 > 3人称単数・尊敬；3人称複数・尊敬)
(Peterson 2014: 81, 84, 88–90)
- b. タミル語： *naam* (1人称複数包括 > 1人称単数・尊敬)；
niinka (2人称複数 > 2人称単数・尊敬)；
avaanka (3人称複数 > 3人称単数・尊敬)
(Brown and Levinson 1987[1978]: 201–202)
- c. ドイツ語： *Sie* (3人称複数 > 2人称単数・尊敬)
(国松 2000: 2123, 中島・平尾・朝倉 2003: 82–83)
- d. フランス語： *vous* (2人称複数 > 2人称単数・尊敬)
(新倉ほか 1996: 75–76；天羽ほか 1998: 1563, 1629)

多くの例では、尊敬の機能を表す際、人称はそのまま複数機能を失い、単数を表すようになる。ただし、カリアー語の *=kiyar* は複数を表すこともでき、ドイツ語の *Sie* は人称が変化している点が例外的である。指示対象ではなく聞き手にのみ敬意を示している例としては、トバ・バタク語（オーストロネシア語族：スマトラ島；van der Tuuk 1971: 218）で1人称単数を指示する際に *hita* (1人称複数包括形) を用いて話者が丁寧さを表現する場合が挙げられる（稿末の付録を参照）。尊敬の機能の詳細は Comrie (1975), Corbett (2000: 220–228), Cysouw (2005) を参照されたい。

範囲は図 10 (4.2.2.1 節参照) である一方、査読者の「たち」の使用範囲は図 17 (4.2.3.3 節参照) と考えられる。

複数形または集合的例示を表す形式が実質的に1つの対象を指す第2の例は「否定的例示」を表すものである。例えば、日本語標準語の「集合的例示」を表すことができる「など」(3.3.2節)が「今、お茶など飲みたくない」(沼田2000: 198; 下線原文)のように実質的に1つの対象を指す場合がそれにあたる。このような「など」の用法は「他者を対象とすれば軽視・軽蔑、自身を対象にすれば謙遜となる」とされる(森田1989: 856)。本稿ではこのような用法を「否定的例示」と呼ぶことにする。なお、本稿の「尊敬」の定義における「聞き手への敬意」は指示対象(先ほどのトバ・バタク語の例では話し手)への否定的評価を含まない。一方、謙遜・軽視・軽蔑などは、指示対象(先ほどの日本語標準語の例では「お茶」)への否定的評価を含む。従って、謙遜などは「尊敬」ではなく「否定的例示」に該当する。

複数形または集合的例示を表す形式が実質的に1つの対象を指す第3の例は、否定的意味を持たず、たんに対象の指示を曖昧にしているような「単独的例示」を表す例である。例えば、日本語標準語の「これなんかお客様によくお似合いになると存じますが、…」(沼田2000: 194; 下線原文)の「なんか」が該当する(詳しくは4.2.2.2節)。本稿ではこのように(あるいは次節の(20)のように)、集合的例示を表す形式または複数形が実質的に1つの対象を指すにも拘わらず、「尊敬」でも「否定的例示」でもない用法を「単独的例示」と呼ぶ。「単独的例示」は、(A)文脈上単数形によって指示対象を限定可能であるにも拘わらず複数形(or他の構成員を想起させる標識)を用いている点、(B)尊敬も否定的含意も持たない点、この2点から結果的に(尊敬・否定の含意を持たずに)指示対象の限定を避ける機能を持っていると言える⁹。ちなみに、副詞に付く例であるため本稿の考察の対象からは外れるが、Shibatani(1985: 838)はトルコ語の複数標識が場所や時を表す副詞に付いて指示を曖昧化する例を報告している(例: *bura-da* ‘here’ > *bura-lar-da* ‘around here’; 下線は引用者; 同書は当該機能を“blurred specification”と呼んでいる)。

3.4.2. 湯湾方言の否定的・単独的例示

湯湾方言の「否定的例示」の例を示す。いずれも謙遜の意味を表している。

(19) 湯湾方言の否定的例示

a. *-kja* の例

[文脈: 結婚式のスピーチ(依頼されるのは1名だけ)を頼まれたとき]

waa-kja=sj̄i jicj-a ak=kai?

1-PL=INST 良い-ADJ STV=DUB

「私などで良いかい?」

[作例/YM氏]

⁹ ちなみに、1つの形式が単数も複数も表せるという点で、本節の現象は2.1節で述べた文法数の対立の中和とよく似ている。しかし当該形式が、(X)形態的に無標ではないこと、(Y)「連合」や「集合的例示」のような(「累加」以外の)「数の区分以外の意味」も表し得ること、の2点が違いとして挙げられる。

b. *-taa* の例

[文脈:自分の息子(ミヨジ)が結婚式のスピーチ(依頼されるのは1名だけ)を頼まれたとき]

mijozī-taa=sjī *jiccj-a* *ak=kai?*
1-PL=INST 良い-ADJ STV=DUB

「ミヨジなどで良いかい？」 [作例/YM氏]

c. *=nkja* の例

[文脈:自分の子が結婚式のスピーチ(依頼されるのは1名だけ)を頼まれたとき]

waa *kʷa=nkja=sjī* *jiccj-a* *ak=ka=jaa?*
1.ADNZ 子=PL=INST 良い-ADJ STV=DUB=SOL

「私の子などで良いのかね？」 [作例/YM氏]

上記の(19a-c)の文脈はいずれも1名しか依頼されない結婚式のスピーチという状況である(話し手にこの文脈を確認した上で調査した)。従って、これらの下線を引いた複数形が(2つ以上の構成員から成る)集合を指すことはありえない。

上記の(19a-c)の例は文脈をコントロールした作例による調査だが、このような例は自然談話にも現れる¹⁰。以下に、単独的例示の例を挙げる(紙幅の関係上、*-kja*を用いた例のみを挙げる)。

(20) 湯湾方言の単独的例示

[文脈:話し手がかつて遊びに行っていた友人の発言を思い出している。]

ura-kja=ga *k-on-boo* *tudinna-sa=nu=cjī* *juu-boo, ...*
2.NHON-PL=NOM 来る-NEG-CND 寂しい-ADJ=CSL=CMPL 言う-CND

「お前などが来ないと寂しいからって言うので、…」 [自然談話/TM氏]

上記の(20)は友人(X)の発言を話し手(TM)が思い出している状況である。Xは多くの友人に先立たれたため、Xを尋ねてくる友人は(少なくともTMの知る限り)TMだけとなった。そのようなときに、Xが上記の文を述べたのである。従って、この場合の*ura-kja*は実質的にはTMただ1人を指していると考えられる(TMにとって未知の存在を含む集合を唐突にXが述べたとは考えにくく、ましてやTMがそのような表現を自然に回想するとも考えにくい)。

¹⁰ 実は、筆者の湯湾方言および宮崎県椎葉村尾前方言の調査の経験上、複数形が実質的に1つの対象を指す用例は作例調査で確認することが非常に難しい。作例調査の場合、話者は単数形と複数形の違いを強く意識するためか、(同一話者への数か月間を置いた調査においても)調査の序盤では複数形に単数指示用法があることはほぼ必ず否定される。そのうえで、その使用を次第に認める場合にまず初めに許容される例は、主語が1人称代名詞複数形で、動詞が不可能(特に、「知らない」の意)を意味する場合である。一方、当該例(複数形が実質的に1つの対象を指す例)は自然談話には一定数現れる。従って、本現象は言語研究において作例調査だけではなく自然談話データにも注目する必要性を示している。

3.5. 複数形の表す「数の区分以外の意味」のまとめ

3.5.1. 通言語的な複数形の「数の区分以外の意味」のまとめ

これまで述べた複数形の「数の区分以外の意味」について、特に (5b-e) に示した機能 (連合, 集合的例示, 選言的例示, 尊敬, 否定的例示・单独的例示) を分ける基準を以下にまとめる (表1の「+」は該当を, 「-」は非該当を表す)。

(21) 異質な構成員を含む集合を分ける基準

- A. 指示対象となる集合は定 (definite) である。
- B. 最終的な指示対象は, 名詞 (or 代名詞) 語幹 (または対応する単数形) の指示対象と, それ以外の指示対象を足し合わせたものである。
- C. 最終的な指示対象には, 名詞 (or 代名詞) 語幹 (または対応する単数形) の指示対象が必ず (あるいは他の構成員より優先的に) 含まれる。

上記の A は 3.2.1 節の連合の定義に対応している。また, 3.3.1 節で集合的例示と選言的例示を分ける基準として示した (12) のうち, 上記の B は (12b) に, C は (12c) にそれぞれ対応する。

表1 異質な構成員を含む集合を分ける基準と複数形の諸機能

| | 連合複数 | 集合的例示 | 尊敬・否定的例示・单独的例示 | 選言的例示 |
|----|------|-------|----------------|-------|
| A. | + | - | - | - |
| B. | + | + | - | - |
| C. | + | + | + | - |

以上を, 累加も含めて大まかなイメージにすると以下ようになる。

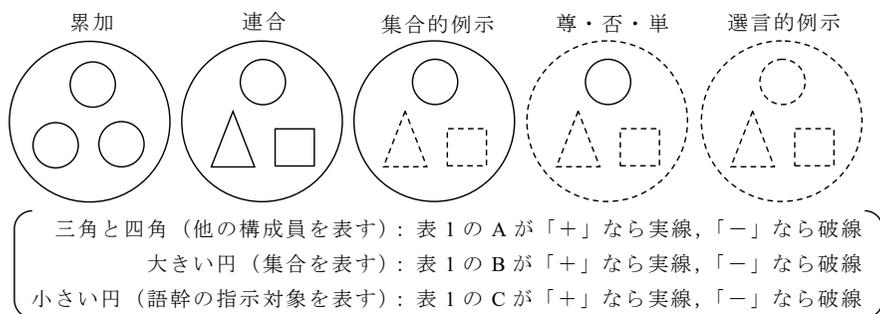


図3 複数形の諸機能の模式図¹¹

¹¹「三角と四角」(語幹の指示対象以外の構成員)は, 累加, 連合, 集合的例示では実在し, 尊敬, 否定的 or 单独的例示, 選言的例示では (実在はしないけれども) 想定されているものとして描いている。このときの「実在」と「想定」の違いは, (基準Bの) 大きい円 (集合) の実線と破線によって区別されている。

なお、上記の基準では尊敬、否定的例示、単独的例示（図3の「尊・否・単」）は（実質的に1つの対象を指しているという点において）同一になる。これらの違いは指示対象への敬意を表すか、否定的意味を表すか、どちらも表さないかの違いによる（3.4節を参照）。ただし、尊敬と残りの2つ（否定的 or 単独的例示）には複数形の語幹に由来する代名詞・名詞の種類の制約に関して大きな違いがある。尊敬を表すのは人称代名詞の例がほとんどである一方（管見の限り、それ以外の事例は定性の高い親族名詞に限られる；稿末の付録にあるキャリアー語の *bbai=kiyar* ‘all his brothers (HON)’; McGregor (1977[1972]) の14頁にあるヒンディー語の *Āpke betē* ‘your son’）、否定的 or 単独的例示にはそのような制約はない（付録を参照）¹²。

3.5.2. 湯湾方言と日本語標準語の複数形の「数の区分以外の意味」のまとめ

先述した湯湾方言と日本語標準語の例を機能と形式によって表2に整理する。

表2 湯湾方言と日本語標準語の複数形に関連する諸形式の比較

| | 湯湾方言 | | 日本語標準語 |
|--------------|---|-------|-----------------------|
| 累加複数 | - <i>kja</i> , - <i>taa</i> , = <i>nkja</i> | 累加複数 | たち |
| 連合複数 | | 連合複数 | |
| 集合的例示 | | 集合的例示 | など（なんか） |
| 否定的 or 単独的例示 | 否定的 or 単独的例示 | | |
| 選言的例示 | (代) 名詞 = <i>gajaaroo</i> 疑問詞 = <i>gajaaroo</i> | 選言的例示 | (代) 名詞 = か 疑問詞 = か |

上記の表から、日本語標準語では「たち」と「など（なんか）」で区別される諸機能が、湯湾方言の *-kja*, *-taa*, *=nkja* では区別されないということが分かる。

なお、湯湾方言では人称代名詞、(人を指す) 指示代名詞、呼称詞、呼称詞ではない親族名詞（例：*maga* 「孫」）のいずれにおいても、累加、連合、集合的例示、否定的 or 単独的例示が使用可能である。しかし、上記以外の人間を表す名詞（例：*jinga* 「男」）の場合、連合複数の機能を表すことができない（さらに、動物名詞・無生物名詞においては連合複数と考え得る文脈をうまく考えられず、未調査である）。

4. 意味地図による通言語的比較

複数形の「数の区分以外の意味」について通言語的に比較すると、1つの機能に1つの形式を用いる言語もあれば、2つ以上の機能に1つの形式を用いる言語もあ

¹² この特徴は、4節で示す図5の意味地図（尊敬が連合と隣接し、否定的 or 単独的例示が集合的例示と隣接する）にも大きく関わる。通言語的に連合複数を表す語幹は人称代名詞、人名、定性の高い親族名詞・役職・人間名詞（Moravcsik 2003: 472, 490；本稿の付録も参照）であり、複数形で尊敬を表す語幹の制約と重なる点が多い（どちらも定性の高い人間名詞にのみ使用される）。一方、累加複数、選言的例示、集合的例示を表す語幹には、否定的 or 単独的例示と同様に、そのような制約がない。以上の制約の有無が、図5において尊敬と連合が隣接し、集合的例示と否定的 or 単独的例示が隣接することの要因の1つであると考えられる。

る（例えば湯湾方言のように）。どの機能同士が1つの形式で表される傾向があるのかを通言語的に比較するために、本稿では「意味地図 (semantic map)」(Haspelmath 1994, Croft 2003: 133-142 など) という方法論を採用する。

まず、4.1 節で意味地図という方法論の概要を示す。続く 4.2 節で本稿の意味地図を示す。

4.1. 「意味地図 (semantic map)」の概説

意味地図とは多義を研究する方法論の1つである。特に、恣意的な多義の乱造および関係づけを言語の形式的な基準で制限することを可能にする。この方法論の要点は Haspelmath (2003) に示されている。本節ではその概要を示す（なお、方法論上の注意点については Malchukov 2010 を参照）。

まず、具体例を示そう。英語の前置詞 *to* は以下のような多義性を持つとされる (Haspelmath 2003: 212；原文の太字を下線に変更)。

(22) 英語の *to* の多義性

- a. *Goethe went to Leipzig as a student.* (direction)
- b. *Eve gave the apple to Adam.* (recipient)
- c. *This seems outrageous to me.* (experiencer)
- d. *I left the party early to get home in time.* (purpose)

上記の諸機能に対し、それぞれを多義として認定すべきか、それともこれらすべて（あるいはそのうちのいくつか）を抽象的な意味に還元すべきかどうかを判断することは難しい。そこで、例えば英語の *to* と似た機能を持つとされるフランス語の前置詞 *à* およびフランス語の代名詞の与格形に注目する。それらの異同を意味地図で図示すると、以下の図4のようなになる (Haspelmath 2003: 213, 219；ただし、今回の議論には無関係な “judicantis” の機能は省略した；図4で *to* が表さない機能の具体例については Haspelmath 2003: 215, 218 を参照されたい)。

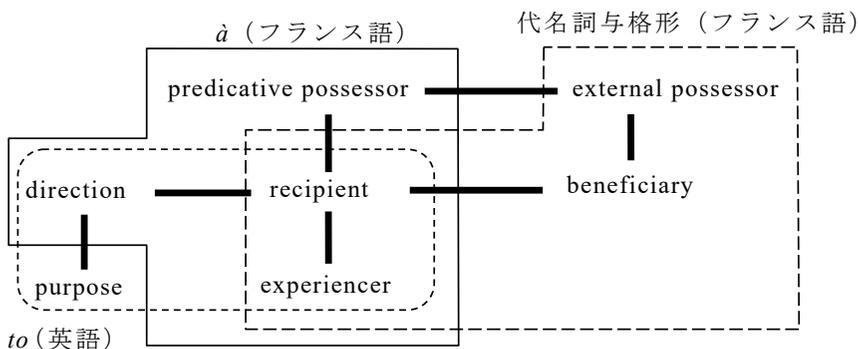


図4 受益者に関わる意味地図と英語・フランス語の各形式の表す範囲

図の見方を説明する。まず、各機能の独立性はそれらの名称が図に存在することによって示されており、それらの隣接性は各機能の間に引かれた直線によって示されている。そして、それらの独立性と隣接性は通言語的な比較を根拠としている。例えば、*direction* と *purpose* の独立性 (= 両者を分ける理由) は、フランス語の *à* が前者のみを表し、後者を表すことができないことを根拠とする。一方で、両者の隣接性 (= 直線で両者をつなげて図示する理由) は、例えば英語の *to* が *direction* と *purpose* の両方を表すことができることを根拠とする。このようにして諸言語の各形式の機能を比較すると、図4のような意味地図を作ることが可能となる (さらに、英語の *to* の表す範囲、フランス語の *à* の表す範囲、フランス語の代名詞与格形の表す範囲も、実線と2種類の破線で囲むことによって示してある; 議論の便宜上、ドイツ語などの例は割愛している。詳細は Haspelmath 1999 を参照)。このように、意味地図は多義の客観的認定と、それらの通言語的な関係性の把握を可能とする。

さらに、意味地図からは含意的普遍性を見出すこともできる。例えば、図4の *purpose* と *experiencer* の間には直線が引かれていない。これが意味するのは、両者を表す形式は、必ずその間の *recipient* と *direction* も表すということである。言い換えれば、現時点でのデータを見る限り、*purpose* と *experiencer* のみを表す形式や、*direction* と *experiencer* のみを表す形式は存在しないということである。

4.2. 本稿の示す意味地図

3節で考察した複数形の「数の区分以外の意味」を意味地図によって示したものが以下の図5である。



図5 複数形の「数の区分以外の意味」の意味地図

上記の図5の作成手順も先の4.1節で示したものと同様である。例えば、累加が独立した機能と認定される理由は、英語の *-s* が累加以外の機能を表せないことが根拠である。一方、累加と連合の間に直線が引かれているのは、例えば日本語標準語の「たち」が両者を表せることが根拠である。このようにして各言語の複数形の「数の区分以外の意味」の共通点と相違点を比較して行くと、最終的に図5が描かれる。現時点では否定的例示と単独的例示を形式的に区別する言語・方言が見つからないため、両者は1つの節点(「否定的 or 単独的例示」)として扱う。

本稿では15種類の語族から20個の言語を選び、それらの複数形の「数の区分以外の意味」を考察した(言語のリストは稿末の付録を参照)。Haspelmath (2003:

217) によれば、系統の異なる 12 の言語を調べれば、経験的にほぼ安定した意味地図が得られるとされる。図 5 から導かれる含意的普遍性は以下の a と b である。

(23) 本稿の意味地図から得られる含意的普遍性

- a. もし「累加」と「否定的 or 单独的例示」を表す形式があるなら、それは必ず「集合的例示」も表す。
- b. もし「連合」と「集合的例示」(または「連合」と「選言的例示」)を表す形式があるなら、それは必ず「累加」も表す。

上記の含意的普遍性には、機能の定義上在り得ないもの(例えば、本稿の「尊敬」を表す形式は必ず「複数形」として「累加」または「連合」も表すため、「尊敬」のみを表すことはない)や、前件を満たす形式が未だ存在しないもの(例えば、「選言的例示と否定的 or 单独的例示の両者を表す形式」)は考慮していない。

以下の節では、各言語の形式を、表す機能が少ない方から順に見て行くことにする。機能が最も少ないときは 1 つ、最も多いときは 4 つになる(図 5 の 6 つの機能全てを表し得る形式は見つかっていない)。言語ごとの具体例と典拠は稿末の付録を参照されたい。

4.2.1. 機能の数が 1 つの形式

本節では、当該形式の表す「数の区分以外の意味」が 1 種類だけの例を示す。

4.2.1.1. 累加複数のみを表す形式

まず、累加複数のみを表す形式を示す。例えば、英語の *horse-s* の *-s* は累加複数のみを表す (Jespersen 1954[1911]: 73)。以下では、図の右側に代表的な言語の該当形式を示す。該当形式が多様・複雑な場合には [] 内に形態法の名称のみを示す。

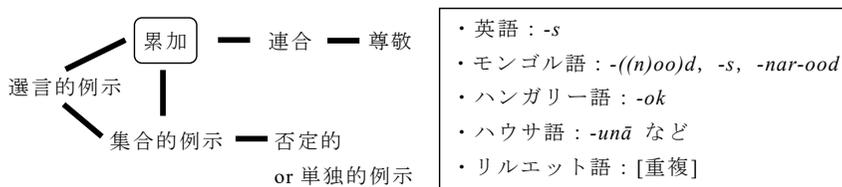


図 6 機能の数が 1 つの形式: 累加

4.2.1.2. 連合複数のみを表す形式

次に、連合複数のみを表す形式を示す。ハンガリー語の *-ek* が好例である (Corbett and Mithun 1996: 5)。中央アラスカユピック語は *-nku* という形態素を持つが、それは(複数を表さずに)純粹に連合の機能のみを表すため、*-nku* には双数接辞の *-k*

または複数接辞の *-t* が後に続き、それによって連合複数を表すことが可能となる (3.1 節の (6) を参照) (Corbett and Mithun 1996: 12)。連合複数のみを表す複数形の存在は多くの言語に報告されている (Daniel and Moravcsik 2013)。

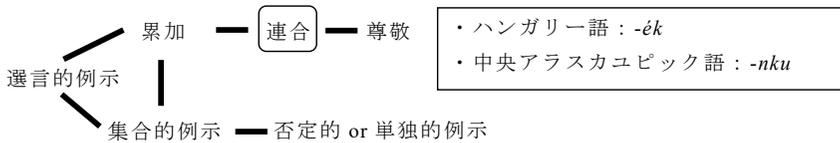


図7 機能の数が1つの形式：連合

4.2.1.3. 選言的例示のみを表す形式

選言的例示のみを表す形式は日本語標準語の「(代) 名詞 = か 疑問詞 = か」と湯湾方言の (代) 名詞 = *gajaaroo* 疑問詞 = *gajaaroo* である (具体例は 3.3.2 節と 3.3.3 節を参照)。

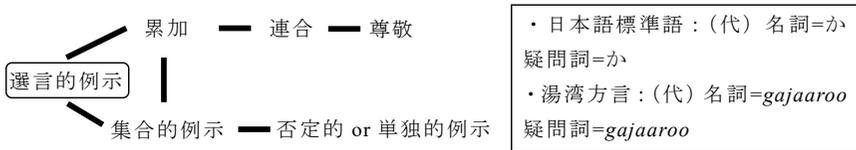


図8 機能の数が1つの形式：選言的例示

4.2.1.4. 集合的例示のみを表す形式

最後に、集合的例示のみを表す形式を示す。3.3.3 節で湯湾方言の連合と集合的例示の区別を示したが (3.5.1 節の表 1 も参照)、文献からの情報では判断が難しい例もある。連合の機能について「指示対象の集合は定である」と定義したことを踏まえ、そこから著しく外れるケースは連合ではなく集合的例示であると判断した。さらに、いずれの典拠も「X and Y」という英訳を用いているため本稿では集合的例示と判断したが、典拠の諸形式が「X or Y」という選言的例示に使用できる可能性もある (その場合、後で示す図 14 のパターンになる)。以下、「集合的例示」と判断した形式と、その根拠となる記述を引用する。モンゴル語の引用元の語例はキリル文字で書かれているため、山越 (2003: 132) の方針に従ってラテン式アルファベットに変えた。

(24) 「集合的例示」のみを表す形式を持つ言語

- a. ネワール語 (カトマンズ方言) (Malla 1985: 26; 下線は引用者)
 - ・形式：重複

- ・意味：“stem meaning and similar other things”
- ・具体例：*la*: ‘water’ > *la:li*: ‘water and similar other things’
- b. トルコ語 (Armoskaite and Kutlu 2014: 283；下線は引用者)
 - ・形式：“*m*-reduplication”
 - ・意味：“the similitive plural [引用者注：*m*-reduplication の機能] … may refer to entities that are non-sentient and unfamiliar”
 - ・具体例：*Ayşe-ler* ‘Ayşe and probably Ayşe’s relatives with whom we are acquainted’ > *Ayşe-ler mayşe-ler* ‘Ayşe … [and] a bunch of other people that we may or may not know. … Only the *m*-reduplicated example includes people beyond the intimate circle of Ayşe.’
- c. モンゴル語 (Street 1963: 109)
 - 形式：重複
 - 意味：“X and related things”
 - 具体例：*azbil mazbil* ‘work and so forth’

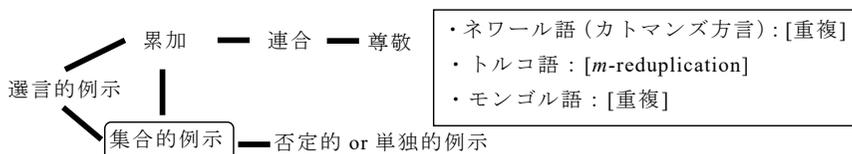


図9 機能の数が1つの形式：集合的例示

集合的例示のみを示す形式を見ると、重複の例が多いが、重複が必ず集合的例示を表すわけではない。例えば、リルエット語（セイリッシュ語族；カナダ南西部）では、重複が累加複数を表す（Haerberlin 1918；稿末の付録を参照）。

本節の形式の中に、「尊敬のみ」または「否定的 or 单独的例示のみ」を表す形式は存在しない。なぜなら、「尊敬」または「否定的 or 单独的例示」とは複数の対象を指示し得る形式（つまり、必然的に累加、連合、集合的例示のいずれかも表せる形式）が実質的に1つの対象を指す現象だからである（3.4.1節を参照）。

4.2.2. 機能の数が2つの形式

本節では、「数の区分以外の意味」を2種類表せる形式を示す。

4.2.2.1. 累加と連合を表す形式

まず、累加と連合を表す形式を示す。日本語標準語の「たち」はその好例である。累加の例は「学生たち」、連合の例は「よしこたち」である（Iwasaki 2013: 57；下線は引用者）。モンゴル語の *-nar* や、ネワール語のカトマンズ方言の *-pi* にも同様の機能がある（本稿末尾の付録を参照）。なお、2人称代名詞（と3人称代名

詞)の複数形が存在するならば、いずれの言語であってもそれらの形式は「累加と連合を表す形式」に該当する (cf. Lyons 1968: 277; Corbett 2000: 84; Moravcsik 2003: 478-479)。

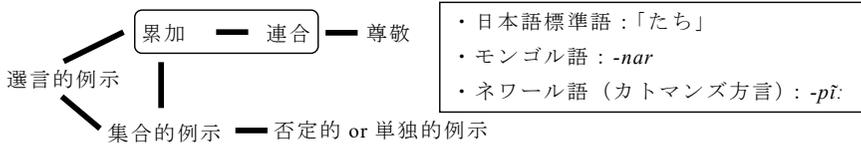


図 10 機能の数が2つの形式: 累加 & 連合

4.2.2.2. 集会的例示と否定的 (or 单独的) 例示を表す形式

次に、集会的例示と否定的 (or 单独的) 例示を表す形式を示す。日本語の「など」、「なんか」、「とか」がそれに該当する。沼田 (2000: 194-202, 208-212) は日本語の「など」と「なんか」はとりたて詞としての機能 (「否定的特立」と「擬似的例示」) を持ち、「など」はさらに並列詞としての機能も持つとする。沼田がとりたて詞の機能として挙げた「否定的特立」とは、名詞語幹が「否定的に特立されている」(同書: 196)、「他者 [= 語幹の指示対象以外の構成員; 引用者注] が感じられずもっぱら先行語句を強調するかのように見える」(同書: 198) ものであり、具体例として「今、お茶など飲みたくない。」(同書同頁; 下線は原文) を挙げている。これは、本稿の「否定的例示」に該当する。とりたて詞としてのもう1つの機能として沼田が挙げる「擬似的例示」とは、「他者が存在するかのようなニュアンスを持たせる」(同書: 194) 例であり、しかもその他者は「架空の他者」(同書: 195) であるような例である。具体例として、「これなんかお客様によくお似合いになると存じますが、…」(同書: 194; 下線は原文) を挙げている。これは、本稿の「单独的例示」に該当する。並列詞の「など」の説明としては「個別要素を部分集合として示しつつ、じつはそれを含む1つの全体集合を提示する」と述べている (同書: 210-211)。具体例として、「バラの花などを贈った」(同書: 211; 下線は原文) を挙げている。これは、本稿の述べる「集会的例示」の機能に該当する¹³。さらに、大和 (2010a: 43) も日

¹³ ここでは沼田 (2000: 210-211) の議論を少し単純化している。沼田は「バラの花などを贈った」(下線は原文) のように、「など」が過去時制で使用された場合には確実に「andの関係で解釈される」が、非過去時制 (および願望などのモダリティー) のときは「orの関係でも可能である」と述べている。例として「今度の誕生日にはバラの花などを贈りたい」(同書: 209; 下線は原文) を挙げている。「orの関係」という記述は本稿の選言的例示の定義と同じである。しかし、この場合の「バラの花など」は「バラの花か何か」という選言的例示と比較すると名詞語幹の指示対象である「バラの花」が他の候補よりも優先されていると (私の内省では) 判断できる。そのため、「など」の機能は非過去時制の場合においても (表1のCの基準より) 選言的例示ではなく、单独的例示に該当するとみなす。ただし、上記の例において「バラの花か何かを贈りたい」と「バラの花などを贈りたい」を同一に感じる日本語話

本語の「なんか」に「一つの要素のみを取り上げ、残されているはずの他のものが想起されない（問題とされない）例」があると指摘し（同書はその用法を「質的例示」と呼んでいる）、さらに大和（2010b: 19）において、「A とか」という表現にも「他の並列的要素を暗示する解釈」（同書: 19; 本稿の「集合的例示」に該当）や「ほかの要素の存在は問題としていない解釈」（同書: 19; 本稿の「単独的例示」に該当）があると指摘している。

上記の「など」、「なんか」、「とか」の持つ「集合的例示」や「否定的 or 単独的例示」の機能は（日本語訳から判断する限り）韓国語の *ttawi* (따위) にも存在するようである（具体例は稿末の付録を参照）。

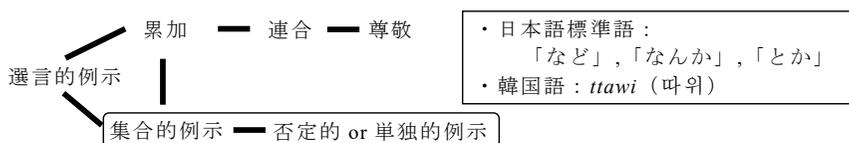


図 11 機能の数が2つの形式：集合的例示 & 否定的 or 単独的例示

4.2.2.3. 連合と尊敬を表す形式

連合と尊敬を表す形式を示す。キャリア語の1人称代名詞の *injar* がそれに当たる。*injar* は1人称双数（除外）を表す代名詞である（表3）。

表3 カリアー語の1人称自立代名詞（Peterson 2014: 81；下線は引用者）

| 単数 | 双数 | | 複数 | |
|-----------|-------------|---------------------|-------------|------------|
| | 包括 | 除外 | 包括 | 除外 |
| <i>in</i> | <i>anaŋ</i> | <i><u>injar</u></i> | <i>aniŋ</i> | <i>ele</i> |

従って、聞き手は指示する集合を同定できるという意味で「連合」に該当する。さらに、この形式は単数の話し手を指示することも可能で、その場合には（話し手から）話し手自身に対する敬意を示す（“the dual exclusive form *injar* is highly marked and only used in contexts in which a high amount of respect is due”; Peterson 2014: 89）。

(25) カリアー語（Peterson 2014: 89；下線は引用者）

injar laʔ=siʔ=jar no khaʔiya abu irib guʔuʔ
 1SG.HON try=PERF=1SG.HON CMPL Kharia MOD.NEG forget OPT

‘I am trying (HON) to keep the Kharia from forgetting (= I have tried that the Kharia

者がいる場合は、その個人語における「など」は「選言的例示」、「集合的例示」、「否定的 or 単独的例示」の3つの機能を表せる例として、4.2.3 節の「機能が3つの形式」に追加する必要がある。

should not forget).’

表3と(25)から1人称双数除外形が「尊敬」に用いられていることが分かる(Peterson 2014: 89)。1人称複数包括形が単数を表しつつ「尊敬」の機能を表す現象はタミル語(ドラヴィダ語族; インド南部; “the higher status person is likely to refer to himself with the ‘royal “we”’ - that is, with *naam*.”; Brown and Levinson 1987[1978]: 202; cf. Cysouw 2005: 221-222)とトバ・バタク語に報告されている。トバ・バタク語の1人称複数包括形は *hita* であり, この形式は「連合」の機能を持つ(van der Tuuk 1971: 218)。さらに, *hita* は2人称単数形の *ho* および1人称単数形の *au* の代わりにも使用可能であり, どちらの場合も聞き手への敬意を示す(同書同頁)。

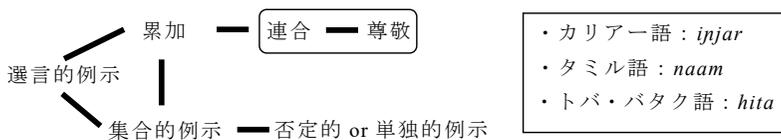


図12 機能の数が2つの形式: 連合 & 尊敬

4.2.2.4. 累加と選言的例示を表す形式

累加と選言的例示を表す形式を持つのは南スラウェシ諸語(オーストロネシア語族; スラウェシ島)で話されている諸言語である。例えば, その中の1つであるマッセンレンプル語は重複によって累加と選言的例示の両方を示す(Yamaguchi 2011)。Yamaguchi (2011) は同書74頁で述べるとおりデータの多くをインドネシア語で記述された文献から引いている。そのため, 同書は Moeliono (1998: 166) の記述をもとに, インドネシア語の重複形で訳されたものは “non-singularity” を, インドネシア語の重複形に *-an* を付加した形で訳されたものは “similarity” を表すと解釈している(同書75頁; Sneddon, et al. 2010: 20-21, 37 も参照されたい)。以下に同言語のエンレカン方言の例を示す。音韻表記と英訳は Yamaguchi (2011) に基づく。

(26) マッセンレンプル語(エンレカン方言)(Yamaguchi 2011: 79)

a. 累加

buku ‘bone’ > *buku-buku* ‘non-singular bone’ [Sikki, et al. 1995: 14]

b. 選言的例示

tedonyk ‘buffalo’ > *tedonyk-tedonyk* ‘animal like a buffalo’ [Hakim, et al. 2011: 25]

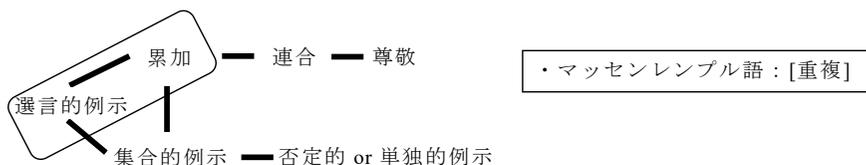


図 13 機能の数が2つの形式：累加 & 選言的例示

4.2.2.5. 選言的例示と集合的例示を表す形式

最後に、選言的例示と集合的例示を表すのはブルシャスキー語（系統不明；パキスタン北部）の“echo formation”（Yoshioka 2012: 167-173）である。“echo formation”とは、重複とよく似た操作であり（ただし、句や節にも適応可能である点が異なる）、被重複要素の初頭音節に音の交替がある。それが表す機能は“and/or the like”（同書：168）とあり、具体例として *bépay* ‘yak’ > *bépay sépay* が挙げられている（同書：169）。*bépay sépay* を日本語に訳す場合、「ヤクか何か」および「ヤクと何か」の両方を表し得る（吉岡乾 2016 年 3 月 9 日私信）。

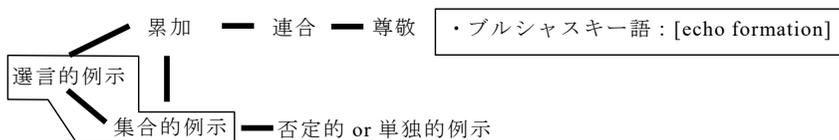


図 14 機能の数が2つの形式：選言的例示 & 集合的例示

4.2.3. 機能の数が3つの形式

本節では、「数の区分以外の意味」を3種類表せる形式を示す。

4.2.3.1. 累加と連合と尊敬を表す形式

まず、累加と連合と尊敬を表す形式を示す。人称代名詞の例が多い。ただし、1人称が話し手を指すという前提に立つならば、1人称代名詞の複数形は「累加」の意味を表し得ない（cf. Jespersen 1954[1911]: 84; Lyons 1968: 277; Daniel 2005: 12, 38）。従って、1人称代名詞の例は「連合」と「尊敬」のみを表す例（先の図 12）ということになる。

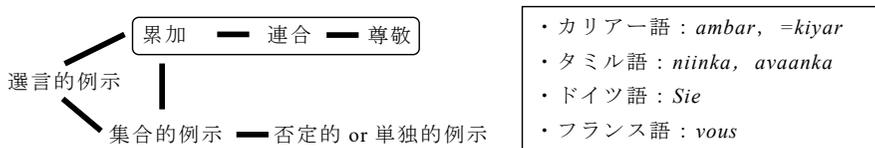


図 15 機能の数が3つの形式：累加 & 連合 & 尊敬

上記の形式は、指示対象への敬意を表さない場合は累加複数または連合複数を表す。一方、指示対象への敬意を表す場合は、単数の対象を指す（ただし、キャリア語の =kiyar は複数の対象を指すこともできる。3.4.1 節を参照）。

4.2.3.2. 累加と連合と選言的例示を表す形式

累加と連合と選言的例示を表す形式は、キャリア語の複数標識の =ki である。累加と選言的例示の例は既に (11) に示した。連合の例を以下に示す。

(27) キャリア語の連合 (Peterson 2014: 91)

gomke=ki=ya? *thoy* *konke?* *romkub=ya?* *pe?*
 master=PL=GEN for slender husked.rice=GEN cooked.rice
dui=yo *sājb* *isin=na* *la?*=*ki*.
 two=CL evening cook=INF IPFV=MID.PST

‘For the master and his family, [a servant] used to cook fine (= slender) rice at two o’clock in the afternoon (=evening).’

gomke=ki (master=PL) ‘the master and his family’ は名詞語幹（‘master’）とその構成員が聞き手に同定可能な「家族」であるため連合複数の機能に該当する。

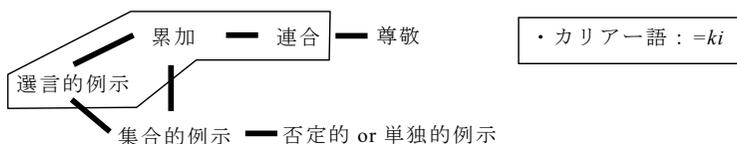


図 16 機能の数が3つの形式：累加 & 連合 & 選言的例示

4.2.3.3. 累加と連合と集合的例示を表す形式

累加と連合と集合的例示を表す形式はドゴン語の複数標識の *mbe* である。累加と集合的例示の例は (10) に示した。連合の例は *kjɔ mbe* 「Kodio とその家族」(‘Kodio et sa famille’) (Plungian 1995: 11) である。

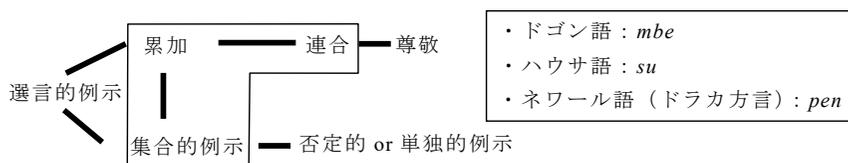


図 17 機能の数が3つの形式：累加 & 連合 & 集合的例示

他にも、ハウサ語の *su* が同様の機能を持つ。Newman (2000: 460) はハウサ語の

su を “associative plural” と呼んでいるが、*su* は個人名に付く (*Mūsā* > *su Mūsā* ‘Musa and the others’) だけではなく、疑問代名詞 *wā* ‘who’ (> *su wā* ‘who (PL)’) や、動物名詞の *bārēwā* ‘gazelle’ (> *su bārēwā* ‘gazelles, etc.’) に付く例もある。これらは「連合」, 「累加」, 「集合的例示」の3つをカバーする形式であると考えられる。さらに、ネワール語のドラカ方言の複数標識 (=pen) の場合、*mucā=pen* (child=PL) では累加複数の ‘children’ を表し、*āme cijmā=pen* (3SG.GEN stepmother=PL) では連合複数の ‘the stepmother and others associated with her, in this case, her husband and daughter’ を表し、*lū cādi=pen* (gold silver=PL) では集合的例示の ‘gold, silver, etc.’ を表す (Genetti 2007: 98–99)。

4.2.4. 機能の数が4つの形式 (累加・連合・集合的例示・否定的 or 単独的例示)

最後に、「数の区分以外の意味」を4種類表せる形式を示す。現時点では、1つの複数標識が表せる機能の数は4種類が最大であり、その機能は累加、連合、集合的例示、否定的 or 単独的例示の4種に限られる。具体例として、3節で論じた奄美大島 (湯湾方言) の複数標識 (*-kja*, *-taa*, *=nkja*) が挙げられる。さらに上代日本語の複数標識の「ラ」にも同様の現象が観察される (小柳 2006)。紙幅の関係上、該当する万葉集の歌全体は挙げず、該当する名詞句とそれに対する同書の解説 (および頁番号) のみを引用する。小柳 (2006) には「同類的複数」と「随伴的複数」という用語がある。例を見る限り、前者は本稿の「累加」、後者は本稿の「連合」と「集合的例示」を包含する用語であると考えられる。また、「ラ」が単数を表す例も挙げられており (同書: 40)、これは本稿の定義によれば「単独的例示」に該当する。

(28) 上代日本語 (小柳 2006) ¹⁴

a. 累加 (同書: 36)

形式: 越の君ら

解説文: 「越の君ら」は「越中の諸君」の意で、複数の「越の君」の集合を表している。

b. 連合 (同書: 37–38; ただし、解説文は渡瀬 2003: 395 からの引用)

¹⁴ 小柳 (2006: 36) にあるとおり、国語学の研究では早い段階から複数標識には2種類の機能があることが指摘されていた。そのうちおそらく最も早いものは草野 (1901: 64) が日本語の「ら」や「ども」の機能として指摘した「複数」(「複数トハ同種ノ物ノ二個以上アルニイヒ」と「含蓄」(「含蓄トハ異種ノ物 (ソノ幾種ナルカハ判然タラズ) ノ二個以上アルニイフ」) の区別である。この場合の「複数」は本稿の「累加複数」に、「含蓄」は本稿の「集合的例示」に該当すると考えられる (同書では、日本語の「たち」には同書の「複数」の意味のみを認めている)。他にも、阪倉 (1966: 315) が『日本書紀』の古訓にある「ラ」の説明として「一つのを代表的に呈示しながら、その後や周辺に、これにまつはつて存在し、これによつて代表されるやうな事態を暗示的に表現しようとする、一種の臚化法的表現である」と述べている。そこに挙げられている例を見る限り、阪倉 (1966: 315) の「臚化法的表現」とは本稿の「集合的例示」と「否定的 or 単独的例示」の両者を含むと考えられる。

形式：荒雄ら

解説文：船出して帰還しないのが荒雄一人ではないことは、人々にはよくわかっていたのであり、船頭荒雄に随伴して乗り組んでいた白水郎たちの存在をも暗示するのが「荒雄ら」の一語ではなかったか。

c. 集合的例示（同書：38）

形式：酒ら

解説文：個体同士ではなく種類同士（「酒」と他の飲食物）の随伴的複数と解される。

d. 単独的例示（同書：40）

形式：娘子ら

解説文：「娘子ら」は家持の妻一人を指し、…（以下略）

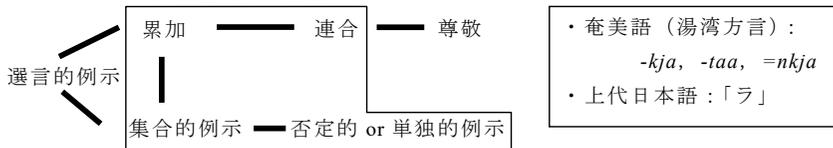


図 18 機能の数が 4 つの形式：累加 & 連合 & 集合的例示 & 否定的 or 単独的例示

上記以外の日本の諸方言の記述にも、複数標識が（累加複数と連合複数に加えて）「集合的例示」や「否定的 or 単独的例示」を表すと判断できる例が多く見つかる。それらを大別すると、（九州以南を除く）西日本の「ラ（-）」、九州の *domo*、奄美の *(n)kja* の 3 つに分かれる。筆者の知る限り、沖縄以南の複数標識には「集合的例示」や「否定的 or 単独的例示」の機能は見つかっていない。西日本の「ラ（-）」の例は、高知県方言、和歌山県方言（東牟婁郡古座町）、三重県方言（北牟婁郡海山町）、石川県方言（石川郡白峰村）（以上 4 方言は、上野 2001: 88, 96–97）、淡路島方言（瀬戸田 1986: 73）、京都府方言（奥村 1962: 299–300）、滋賀県方言（筧 1962: 215–216）、大阪泉州方言（大島 2018: 139–141）、奈良県方言（西宮 1962: 362）、関西方言（上林 2017: 67–69；同書には「関西方言」とあるだけで、具体的な地域の言及はない）である。九州方言の例は、鹿児島県甕島里方言（森・平塚・黒木 2015: 183–184）¹⁵ と宮崎県椎葉村尾前方言（清岡・平塚・新永 2016: 60–61）の

¹⁵ 森・平塚・黒木（2015: 183）では里方言の *=domo* の例として「geemu=domee zikaN=ba cuka-una『ゲームなんかに時間を使うな。』」を挙げている（下線は引用者；同書 26 頁より *=domo* は与格と融合して /*domee*/ になる）。この例文の *=domo* の機能は（日本語標準語訳から判断する限り）本稿の「否定的例示」に該当すると思われる。同書は他にも人称代名詞、親族名詞、個人名に *=domo* が付く例を示し、それらの説明として「それぞれの集団の代表者を例示している（associative plural; cf. Corbett 2000）に過ぎない。よって、里方言の *=domo* は、『似たような性質を持つ集団のなかから 1 つを代表させる接尾辞』と定義できる」と述べている（同書：183–184）。従って、同書では本稿の「連合複数」と「否定的 or 単独的例示」を（さらに、定義から判断すると「集合的例示」も）まとめて「associative plural」と呼んでいると判断できる。

*domo*である。最後の奄美方言の例は、奄美大島名瀬方言の *kja* (上村・須山 1993: 401)、奄美大島浦方言と奄美大島瀬戸内町方言の *=nkja* (重野・白田 2016: 113; 水谷・齊藤 2007: 76-79; ローマ字表記は湯湾方言の表記法に統一)である。これらの記述はほとんどが断片的な報告であるため、より詳細な調査が待たれる¹⁶。

5. 結論と今後の課題

本稿では、湯湾方言の名詞・代名詞の複数標識が持つ(複数を表す以外の)機能を詳細に記述した。さらに、湯湾方言の当該機能と他言語の複数形の機能とを比較し、通言語的に名詞・代名詞の複数形が持つ「数の区分以外の意味」に関する意味地図を提案した。本稿が提示した「数の区分以外の意味」とは累加、連合、集合的例示、選言的例示、尊敬、否定的 or 単独的例示の6種類である。

特に、連合、集合的例示、選言的例示は先行研究でも明確に区別されておらず、異なる機能に同一の名称を与える研究が多い。本稿では、それらを区別する意味的根拠(3.5.1節に示した基準)と形式的根拠(4節に示した意味地図)の両方を示した。さらに、複数形が実質的に1つの対象を指す機能のうち、尊敬とは異なる機能(否定的 or 単独的例示)が持つ類型論的価値も示した。

本稿に残された課題は3つある。1つ目は、複数形の「数の区分以外の意味」について、各言語のさらに詳細な調査を行うことである。3.1節で述べたとおり、当該機能は文法数の研究において周知的・断片的にしか考察されていないため、現時点でのデータには限界がある。従って、今後の調査により、本稿で示した意味地図の分布(あるいは各言語の複数標識が持つ機能の範囲)が変わることは十分に有り得る。

次に、複数標識のホストとなる名詞(もしくは名詞語幹)には各言語の機能ごとに制限がある。例えば、日本語標準語では複数標識(「たち」)のホストに「誰」が来ることは不可能(「*誰たち」)だが、湯湾方言の *tat-taa* (誰-PL) (3.2.2節)やハ

¹⁶ 数少ない例外は上野(2001)の高知県方言の複数標識「ラ(一)」に関する報告と上林(2017)の関西方言の複数標識「ラ」に関する報告である。上野(2001)は豊富なデータを提示しているが、例文の標準語訳において「ラ(一)」の部分に「*」で埋めて当該形式の標準語訳を避けているため、当該形式の持つ機能が理解しにくい。同書の考察の中心は「ラ(一)」の直前(または直後)に来る形態素の種類を記述することであり、当該形式の機能の説明は(87-88頁に若干の説明があるが)判然としない。

一方、上林(2017)は豊富なデータとともに、複数標識の諸機能の説明も試みており、画期的である。同書が「ラ」の機能として挙げた「典型的例示」と「含意的例示」は本稿の「単独的例示」に対応し、同書の「マイナス感情の提示(軽卑・敬遠)」は本稿の「否定的例示」に対応する。上林(2017)では語幹の指示対象以外の候補があると話し手が考えている場合(「典型的例示」と考えていない場合(「含意的例示」)を区別しているが、本稿では両者とも「単独的例示」という1つの機能として扱った。その理由は2つある。1つは、指示対象以外の候補の有無を確定することが困難な場合があるため(上林2017: 68にも「典型的・含意的例示は連続体を成す」とある)。もう1つは、現時点で両者を形式的に区別する言語・方言が存在しないためである。同書では本稿の「集合的例示」にあたる機能については言及していない(もしくは、「連合複数」と区別していない)。

ウサ語 *su wā* (誰 -PL) (4.2.3 節) では可能である。そのような制限を各言語の機能ごとに調べる必要がある¹⁷。

最後に、上記の諸機能と他の文法現象との関連である。特に、連合や集合的例示と等位接続（特に “inclusory construction” ; Haspelmath 2004: 25–26, Bhat 2004: 94–96）との関係、「尊敬」と人称（特に “clusivity” ; Filimonova 2005）との関係は考察を深める必要がある。

略号

| | | | |
|-------|----------------------|------|---------------------------------|
| A:TEL | anticipatory telic | INST | instrumental |
| ABL | ablative | IPFV | imperfective |
| ACT | active | IRR | irrealis |
| ADJ | adjective inflection | LOC | locative |
| ADNZ | adnominalizer | MID | middle |
| ADVRS | adversative | MOD | modal (negation) |
| AOR | aorist | NEG | negative |
| ASS | assertive | NHON | non-honorific |
| ASSC | associative | NOM | nominative |
| CFM | confirmation | NPST | non-past |
| CL | classifier | OPT | optative |
| CMPL | complementiser | PERF | perfect |
| CND | conditional | PFOC | predicate of focus construction |
| CSL | causal | PL | plural |
| DAT | dative | PN | personal name |
| DU | dual | PROG | progressive |
| DUB | dubitative | PST | past |
| ECHO | echo-formation | PTCP | participle |
| FN | formal noun | SG | singular |
| FOC | focus | SEQ | sequential |
| GEN | genitive | SOL | solidarity |
| HON | honorific | STV | stative verb |
| ILST | illustrative | TOP | topic |
| IMP | imperative | UMRK | unmarked |
| INF | infinitive | VOC | vocative |
| INFR | inferential | VOL | volitional |

¹⁷ この点について、大島 (2018) の研究が有意義である。同書は大阪泉州方言の複数標識「ら」が無生物名詞についた例を調べ、年配層では累加複数の意味を表せない一方、若年層では表すことができることを明らかにしている (同書: 139–141)。

付録：各言語の「数の区分以外の意味」を持つ形式（言語名は五十音順）¹⁸

| | |
|--|--|
| 言語名（系統：主に話されている地域） | |
| 【機能】単数形「訳」> 当該機能を表す形「訳」（参考文献：ページ）の順で以下に示す。 | |
| 奄美語の湯湾方言（日琉語族；奄美大島） | |
| 【累】 | <i>ura</i> 「(2人称単数)」> <i>ura-kja</i> 「(2人称複数)」(筆者のフィールドデータ) |
| 【連】 | <i>wa-n</i> 「(1人称単数)」> <i>waa-kja</i> 「(1人称複数)」(筆者のフィールドデータ) |
| 【選】 | <i>binzjaa</i> 「ヤギ」> <i>binzjaa=gajaroo nuu=gajaroo</i> 「ヤギかなんか」(筆者のフィールドデータ) |
| 【集】 | <i>wa-n</i> 「(1人称単数)」> <i>waa-kja</i> 「私など」(筆者のフィールドデータ) |
| 【否・単】 | <i>wa-n</i> 「(1人称単数)」> <i>waa-kja</i> 「私など」(筆者のフィールドデータ); <i>junomi</i> 「湯呑茶碗」> <i>junomi=nkja</i> 「湯呑茶碗など」(筆者のフィールドデータ) |
| 英語（印欧語族；北米・ブリテン） | |
| 【累】 | <i>horse</i> > <i>horse-s</i> (Jespersen 1954[1911]: 73) |
| 【連】 | <i>I</i> > <i>we</i> (Jespersen 1954[1911]: 84) |
| カリアー (Kharia) 語（オーストロアジア語族；インド北東部） | |
| 【累】 | <i>am</i> 「(2人称単数)」> <i>ambar</i> 「(2人称双数)」; <i>lebu</i> 'man' > <i>lebu=kiyar</i> 'two men'; <i>lebu</i> 'man' > <i>lebu=ki</i> 'men' (Peterson 2014: 81, 85) |
| 【連】 | <i>jn</i> 「(1人称単数)」> <i>injjar</i> 「(1人称双数除外)」; <i>am</i> 「(2人称単数)」> <i>ambar</i> 「(2人称双数)」; <i>etwa</i> 'Etwa (人名)」> <i>etwa=kiyar</i> 'Etwa and his wife'; <i>gomke</i> 'master' > <i>gomke=ki</i> 'the master and his family' (Peterson 2014: 81, 88, 91) |
| 【選】 | <i>da?</i> 'water' > <i>da?=ki</i> 'water (or whatever)' (Peterson 2014: 105) |
| 【尊】 | <i>jn</i> 「(1人称単数)」> <i>injjar</i> 「(1人称単数尊敬)」; <i>am</i> 「(2人称単数)」> <i>ambar</i> 「(2人称単数尊敬)」; <i>bhai</i> 'brother' > <i>bhai=kiyar</i> 'all his brothers (HON)' (Peterson 2014: 81, 84, 88-90) |
| 韓国語（系統不明；朝鮮半島南部） | |
| 【累】 | <i>n>jane</i> 「(2人称単数)」> <i>n>'il Janedur</i> 「(2人称複数)」(梅田 1989: 956-957) |
| 【連】 | <i>n>jane</i> 「(2人称単数)」> <i>n>'il Janedur</i> 「(2人称複数)」(梅田 1989: 956-957) |
| 【集】 | <i>nongcak-mul</i> 'agricultural products' > <i>nongcak-mul ttarwi</i> 'agricultural products and the like' (Martin 1992: 827) |
| 【否・単】 | <i>nuy</i> 「お前」> <i>nuy ttarwi</i> 「お前なんか」(金 1984: 225) ¹⁹ |
| 上代日本語（日琉語族；日本） | |
| 【累】 | 越の君 > 越の君ら 「複数の『越中の君』の集合」(小柳 2006: 36) |
| 【連】 | 荒雄 > 荒雄ら 「荒尾…[と]白水郎たち」(渡瀬 2003: 395) |
| 【集】 | 酒 > 酒ら 「『酒』と他の飲食物」(小柳 2006: 38) |
| 【否・単】 | 娘子 > 娘子ら 「家持の妻一人」(小柳 2006: 40) |

¹⁸ 付録は以下の方針に基づきまとめた。(1) 当該機能を表す形態素には下線を引く。(2) 文献に単数形が明示されていない場合でも、文献の情報から複数標識を同定できた場合には、それを取り除いた形を単数形として示した。(3) 「訳」の部分は原則として参考文献の訳をそのまま引用した。ただし、英語と（現代）日本語の例は訳を省略した。(4) 紙幅の都合上、名詞句のみを引用して示した。(5) 各言語において掲載しなかった機能もある（語例が無いことは必ずしも当該機能が無いことを意味しない）。(6) 言語名のカタカナ表記は三省堂の『言語学大辞典』を参照した。言語の系統は、『言語学大辞典』, Ethnologue (<http://www.ethnologue.com/>), WALS (<http://wals.info/languoid>) を参照した。なお、【】内の文字（累、連、尊、集、選、否・単）は、3節に示した諸機能の頭文字を採用している。

¹⁹ 金（1984）のハンデル表記のローマ字化は Martin（1992: 9-12）の方針に従った。

| | |
|---|--|
| タミル語 (ドラヴィダ語族; インド南部) | |
| 【累】 | <i>nii</i> 「(2人称単数)」> <i>niinka</i> 「(2人称複数)」; <i>avaan</i> 「(3人称男性単数)」> <i>avaanka</i> 「(3人称複数)」(Brown and Levinson 1987 [1978]: 201) |
| 【連】 | <i>naan</i> 「(1人称単数)」> <i>naam</i> 「(1人称複数包括)」; <i>nii</i> 「(2人称単数)」> <i>niinka</i> 「(2人称複数)」; <i>avaan</i> 「(3人称男性単数)」> <i>avaanka</i> 「(3人称複数)」(Brown and Levinson 1987 [1978]: 201) |
| 【尊】 | <i>naan</i> 「(1人称単数)」> <i>naam</i> 「(1人称単数尊敬)」; <i>nii</i> 「(2人称単数)」> <i>niinka</i> 「(2人称単数尊敬)」; <i>avaan</i> 「(3人称男性単数)」> <i>avaanka</i> 「(3人称単数尊敬)」(Brown and Levinson 1987 [1978]: 201-202) |
| 中央アラスカユピック語 (エスキモー・アリュート語族; 南西アラスカ) | |
| 【累】 | <i>qayaq</i> 'one kayak' > <i>qaya-t</i> 'three or more kayaks' (Corbett and Mithun 1996: 11, 12) |
| 【連】 | <i>cuna</i> 'Chuna (人名)' > <i>cuna-nku-t</i> 'Chuna and his family/friends' (Corbett and Mithun 1996: 11, 12) |
| ドイツ語 (印欧語族; ドイツ) | |
| 【累】 | <i>der Arzt</i> 「医師」> <i>die Ärzte</i> 「医師(複数)」; <i>du</i> 「(2人称単数)」> <i>ibr</i> 「(2人称複数)」; <i>er/sie/es</i> 「(3人称単数)」> <i>sie</i> 「(3人称複数)」(中島・平尾・朝倉 2003: 71, 82-83) |
| 【連】 | <i>du</i> 「(2人称単数)」> <i>ibr</i> 「(2人称複数)」; <i>er/sie/es</i> 「(3人称単数)」> <i>sie</i> 「(3人称複数)」(中島・平尾・朝倉 2003: 82-83) |
| 【尊】 | <i>du</i> 「(2人称単数)」> <i>Sie</i> 「(2人称単数尊敬)」(中島・平尾・朝倉 2003: 82-83) |
| ドゴン (Dogon) 語のトンボ (tommo-so) 方言 ²⁰ (ニジェール・コンゴ語族; マリ) | |
| 【累】 | <i>enc</i> 「ヤギ」> <i>enc mbe</i> 「ヤギたち」('chèvres') (Plungian 1995: 9) |
| 【連】 | <i>kɔjɔ</i> 「Kodio (人名)」> <i>kɔjɔ mbe</i> 「Kodio とその家族」('Kodio et sa famille') (Plungian 1995: 11) |
| 【集】 | <i>isu</i> 「魚」('poisson') > <i>isu mbe</i> 「魚など」('du poisson et cetera') (Plungian 1995: 11) |
| トバ・バタク語 (オーストロネシア語族; スマトラ島) ²¹ | |
| 【累】 | <i>bò</i> 「(2人称単数)」> <i>hamu</i> 「(2人称複数)」(柴田 1992: 168) |
| 【連】 | <i>au</i> 「(1人称単数)」> <i>hita</i> 「(1人称複数包括)」(van der Tuuk 1971: 218; 柴田 1992: 168); <i>bò</i> 「(2人称単数)」> <i>hamu</i> 「(2人称複数)」(柴田 1992: 168) |
| 【尊】 | <i>bo</i> 「(2人称単数)」> <i>hita</i> 'used in place of <i>bo</i> ... when the speaker wishes expressly to be polite' (van der Tuuk 1971: 218); <i>ho</i> 「(2人称単数)」> <i>hamu</i> 「(2人称単数尊敬)」(柴田 1992: 168); <i>au</i> 「(1人称単数)」> <i>hita</i> 'used in place of ... <i>au</i> when the speaker wishes expressly to be polite' (van der Tuuk 1971: 218) |
| トルコ語 (チュルク諸語; トルコ) | |
| 【累】 | <i>kitap</i> 'book' or 'books' > <i>kitap-lar</i> 'books' (Armoskaite and Kutlu 2014: 274) |
| 【連】 | <i>Ayşe</i> 'Ayşe (人名)' > <i>Ayşe-ler</i> 'Ayşe and probably Ayşe's relatives with whom we are acquainted' (Armoskaite and Kutlu 2014: 283) |
| 【集】 | <i>elma</i> 'apple' > <i>elma m-elma</i> 'apple and the like' (Armoskaite and Kutlu 2014: 274) |
| (現代) 日本語標準語 (日琉語族; 日本) | |
| 【累】 | 学生 > 学生 - <u>たち</u> (Iwasaki 2013: 57) |

²⁰『言語学大辞典 第2巻』の1310頁の方言分類の中にはPlungian (1995: 3)の“le dialecte tommo-so”に完全に対応するものが無かったため、音形が最も近い「トンボ方言 (tombo so:)」であると判断し、そのカタカナ表記を採用した。

²¹柴田 (1992) と van der Tuuk (1971) の表記の違いは、後者が母音の違いを示す補助記号を使用せず、最終音節のアクセント標示にのみ「'」を使用している点にある (van der Tuuk 1971: 6 の「N.B.」を参照)。

| | |
|---|---|
| 【連】 | よしこ > よしこ-たち (Iwasaki 2013: 57) |
| 【選】 | ジュース > ジュースかなんか (日本語記述文法研究会 2009: 155) |
| 【集】 | バラの花 > バラの花など (沼田 2000: 211); 田中さん > 田中さんなんか (澤田 2007: 162-163; cf. 大和 2010b: 20); キムチチゲ > キムチチゲとか (日本語記述文法研究会 2009: 156; cf. 大和 2010b: 20) |
| 【否・単】 | バラの花 > バラの花など (沼田 2000: 209); 小津 > 小津なんか (など) (澤田 2007: 159; cf. 大和 2010b: 20); 湯上がりのビール > 湯上がりのビールとか (大和 2010b: 20) |
| ネワール (Newar) 語のカトマンズ方言 ²² (シナ・チベット語族; ネパール) | |
| 【累】 | <i>juju</i> 'king' > <i>juju-pī</i> : 'kings' (Malla 1985: 31) |
| 【連】 | <i>rām</i> 「ラム (人名)」 > <i>rām-pī</i> : 「ラムとその家族・友人」 (桐生 2002: 53; cf. Hale and Shrestha 2006: 97) |
| 【集】 | <i>ko</i> : 'crow' > <i>ko:ki</i> : 'crow and similar other things' (Malla 1985: 26) |
| ネワール (Newar) 語のドラカ方言 (シナ・チベット語族; ネパール) | |
| 【累】 | <i>mucā</i> 'child' > <i>mucā=pen</i> 'children' (Genetti 2007: 98) |
| 【連】 | <i>āme cijmā</i> (3SG.GEN stepmother) > <i>āme cijmā=pen</i> 'the stepmother and others associated with her, in this case, her husband and daughter' (Genetti 2007: 99) |
| 【集】 | <i>lū cādi</i> (gold silver) > <i>lū cādi=pen</i> 'gold, silver, etc.' (Genetti 2007: 99) |
| ハウサ (Hausa) 語 (アフロ・アジア語族; ナイジェリア北部・ニジェール南部) | |
| 【累】 | <i>jāki</i> 'donkey' > <i>jāk-unā</i> 'donkeys' (Newman 2000: 430); <i>wā</i> 'who' > <i>su wā</i> 'who (PL)' (Newman 2000: 460) |
| 【連】 | <i>Mūsā</i> 'Musa (人名)' > <i>su Mūsā</i> 'Musa and the others' (Newman 2000: 136, 460, 476) |
| 【集】 | <i>bārēwā</i> > <i>su bārēwā</i> 'gazelles, etc.' (Newman 2000: 460) |
| ハンガリー語 (ウラル語族; ハンガリー) | |
| 【累】 | <i>János</i> 'John (人名)' > <i>János-ok</i> 'more than one John' (Corbett and Mithun 1996: 5) |
| 【連】 | <i>János</i> 'John (人名)' > <i>János-ék</i> 'John and associates' (Corbett and Mithun 1996: 5) |
| フランス語 (印欧語族; フランス) | |
| 【累】 | <i>tu</i> 「(2人称単数)」 > <i>vous</i> 「(2人称複数)」 (新倉ほか 1996: 75-76) |
| 【連】 | <i>tu</i> 「(2人称単数)」 > <i>vous</i> 「(2人称複数)」 (新倉ほか 1996: 75-76) |
| 【尊】 | <i>tu</i> 「(2人称単数)」 > <i>vous</i> 「(2人称単数尊敬)」 (新倉ほか 1996: 75-76) |
| ブルシャスキー語 (系統不明; パキスタン北部) | |
| 【累】 | <i>buk</i> 'dog' > <i>bukāi</i> 'dogs' (Yoshioka 2012: 39) |
| 【連】 | <i>je</i> 「(1人称単数)」 > <i>mi</i> 「(1人称複数)」 (Yoshioka 2012: 79) |
| 【集】 | <i>bēpay 'yak'</i> > <i>bēpay šēpay</i> 'yak and the like' (Yoshioka 2012: 168-169) |
| 【選】 | <i>bēpay 'yak'</i> > <i>bēpay šēpay</i> 'yak or the like' (Yoshioka 2012: 168-169) |
| マッセンレンプル (Massenrempulu) 語のエンレカン (Endekan) 方言 (オーストロネシア語族; スラウエシ島南西部) | |
| 【累】 | <i>buku</i> 'bone' > <i>buku-buku</i> 'non-singular bone' (Yamaguchi 2011: 79) |
| 【選】 | <i>tedonk</i> 'buffalo' > <i>tedonk-tedonk</i> 'animal like a buffalo' (Yamaguchi 2011: 79) |

²² 桐生 (2002) のデヴァナガリ文字で記載されている語例は同書 21 頁と 24 頁を元に音韻表記 (ローマ字) に変えた。形態素境界は Hale and Shrestha (2006: 33) を参考にした。

| | |
|---------------------------------------|---|
| モンゴル語 (モンゴル語族; モンゴル) | |
| 【累】 | <i>baatar</i> 「英雄」 > <i>baatar-ood</i> 「英雄 - 複」; <i>ug</i> 「単語」 > <i>ug-s</i> 「単語 - 複」; <i>lam</i> 「僧」 > <i>lam-nar-ood</i> 「僧 - 複 - 複」; <i>bacš</i> 「先生」 > <i>bacš-nar</i> 「先生 - 複」 (山越 2003: 132-133, 139, 143) |
| 【連】 | <i>jamakosi</i> 「ヤマコシ (人名)」 > <i>jamakosi-nar</i> 「ヤマコシたち」 (山越 2003: 138) |
| 【集】 | <i>doɔl</i> 「モンゴル服」 > <i>doɔl mɔɔl</i> 「モンゴル服やらなにやら」 (一ノ瀬 1992: 289; cf. Street 1963: 109) |
| リルエット (Lillooet) 語 (セイリツシュ語族; カナダ南西部) | |
| 【累】 | <i>eczē'k</i> 'log' > <i>ECZUKECZē'k</i> 'logs' (Haerberlin 1918: 155) |

参考文献

- 天羽均・大概鉄男・佐々木康之・多田道太郎・西川長夫・山田稔 (編) (1998) 『クラウン仏和辞典 第4版』東京:三省堂。
- イエスベルセン・オットー (2006) 安藤貞雄 (訳) 『文法の原理』東京:岩波書店。
- 一ノ瀬恵 (1992) 「モンゴル語の語構成における非接尾辞的手法: 北方の接尾辞型諸言語との対照をつうじて」宮岡伯人 (編) 『北の言語: 類型と歴史』279-295. 東京:三省堂。
- 上野智子 (2001) 「高知県方言ラ (一) の暗示性と明示性」『日本語科学』9: 79-100. 東京: 国書刊行会。
- 上村幸雄・須山名保子 (1993) 「奄美方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』5: 390-418. 東京:三省堂。
- 榎垣実 (編) (1962) 『近畿方言の総合的研究』東京:三省堂。
- 梅田博之 (1989) 「朝鮮語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』2: 950-980. 東京:三省堂。
- 大島一 (2018) 「大阪泉州方言における『ら』の複数性」『日本言語学会第157回大会予稿集』136-141.
- 奥村三雄 (1962) 「京都府方言」榎垣実 (編) 253-300.
- 寛大城 (1962) 「滋賀県方言」榎垣実 (編) 159-218.
- 風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の3グループ (チュルク, モンゴル, ツングース), 及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのか: 対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (編) 『日本語系統論の現在』249-340. 京都:国際日本文化研究センター。
- 上林葵 (2017) 「関西方言における接尾辞『ラ』」『阪大社会言語学研究ノート』15: 59-71.
- 金素雲 (編) (1984) 『現代韓日辞典 机上版』東京:高麗書林。
- 清岡美里・平塚雄亮・新永悠人 (2016) 「代名詞体系記述の中間報告」下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日 (編) 『尾前調査班 中間報告書一宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説一』55-62. 東京: 国立国語研究所。
- 桐生和幸 (編) (2002) 『ネワール語文法』東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 草野清民 (1901) 『草野氏日本文典』東京:富山房。
- 国松孝二 (編集代表) (2000) 『小学館 独和大辞典 第2版 コンパクト版』東京:小学館。
- 小柳智一 (2006) 「上代の複数: 接尾語ラを中心に」『萬葉』196: 35-51.
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』東京:角川書店。
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』東京:くろしお出版。
- 重野裕美・白田理人 (2016) 「北琉球奄美方言における有生性階層: 奄美大島浦方言と喜界島上嘉鉄方言・小野津方言を例に」『広島経済大学研究論集』38(4): 111-133.
- 柴田紀男 (1992) 「バタク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第3巻 世界言語編 (下 -1)』: 164-170. 東京:三省堂。
- 下地理則 (2006) 「南琉球語宮古伊良部島方言」中山俊秀・江畑冬生 (編) 『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』85-117. 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 中島悠爾・平尾浩三・朝倉巧 (2003) 『必携ドイツ文法総まとめ改訂版一』東京:白水社。
- 新倉俊一・朝比奈誼・稻生永・井村順一・富永明夫・宮原信・山本顕一 (1996) 『改訂版 フ

- ランス語ハンドブック』東京：白水社。
- 新永悠人 (2013) 「北琉球奄美湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層」『日本方言研究会 第96回研究発表会 発表原稿集』41-48.
- 新永悠人 (2016) 「北琉球奄美大島湯湾方言の複数または例示を表す *kja* と *nkja* の形式的分析」『成城国文学』32: 46-57.
- 新永悠人・石原昌英・西岡敏 (2014) 「北琉球諸語 (奄美語・国頭語・沖縄語) の存続力と危機度」下地理則・ハインリッヒパトリック (編) 『琉球諸語の保持を目指して』96-142. 東京：ココ出版.
- 西宮一民 (1962) 「奈良県方言」榎垣実 (編) 301-364.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法』5. 東京：くろしお出版.
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」『時・否定と取り立て』151-216. 東京：岩波書店.
- 瀬川田龍昇 (1986) 『淡路方言の研究』兵庫：神戸新聞出版センター.
- 水谷美保・齊藤美穂 (2007) 「方言との接触による標準語形式の意味・用法の変容：奄美におけるとりたて形式『ナンカ』の用法の拡張」『日本語文法』7(2): 65-82.
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (2015) 『甌島里方言記述文法書』東京：国立国語研究所 <http://hdl.handle.net/10112/9071> [2020年3月アクセス]
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』東京：角川学芸出版.
- 山越康裕 (2003) 「モンゴル語の複数接尾辞と名詞句階層」『言語研究』124: 131-153.
- 大和啓子 (2010a) 「例示の助詞タリ、ナンカの語用論的効果」『表現研究』91: 42-51.
- 大和啓子 (2010b) 「『とか』による例示について」『筑波応用言語学研究』17: 17-27.
- 渡瀬昌忠 (2003) 『渡瀬昌忠著作集 第8巻 万葉歌集群構造論』東京：おうふう.
- Armoskaite, Solveiga and Deniz Aysegul Kutlu (2014) Turkish m-reduplication: A case of similitive number. *Turkic Languages* 18: 271-288.
- Bhat, D. N. S. (2004) Conjunction and personal pronouns. In: Martin Haspelmath (ed.) (2004), 89-105.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987[1978]) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1975) Polite plurals and predicate agreement. *Language* 51: 406-418.
- Corbett, Greville G. (2000) *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Corbett, Greville G. and Marianne Mithun (1996) Associative forms in a typology of number systems: evidence from Yup'ik. *Journal of Linguistics* 32: 1-17. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William (2003) *Typology and universals* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Cysouw, Michael (2005) A typology of honorific uses of clusivity. In: Filimonova (ed.) (2005), 213-230.
- Daniel, Michael (2005) Understanding inclusives. In: Filimonova (ed.) (2005), 3-48.
- Daniel, Michael and Edith Moravcsik (2013) The associative plural. In: Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <http://wals.info/feature/36A#2/28.3/148.4> [accessed March 2020].
- Edgerton, Franklin (1909) Origin and development of the elliptic dual and of dvandva compounds. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der Indogermanischen Sprachen* 43: 110-120.
- Filimonova, Elena (ed.) (2005) *Clusivity: Typology and case studies of the inclusive-exclusive distinction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Genetti, Carol (2007) *A grammar of Dolakha Newar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hakim, Zainuddin, Syamsul Rijal, and Abdul Kadir Mulya (2011) Bagian pertama: Tata bahasa kontrasitif bahasa massenrempulu. In: Masao Yamaguchi (ed.) *Tata Bahasa Kontrasitif Bahasa Massenrempulu*. Kyoto: Hokuto Publishing Inc.
- Haeblerlin, Herman K. (1918) Types of reduplication in the Salish dialects. *International Journal of American Linguistics* 1(2): 154-174.
- Hale, Austin and Kedār P. Shrestha (2006) *Newār (Nepāl Bhāsā)*. Lincom Europa.
- Haspelmath, Martin (1994) Implicational universals in the distribution of indefinite pronouns. *Sprachtypologie und Universalienforschung* 47(3): 160-185.
- Haspelmath, Martin (1999) External possession in a European areal perspective. In: Doris Payne and Immanuel Barshi (eds.) *External possession*, 109-135. Amsterdam: Benjamins.

- Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meanings: Semantic maps and cross-linguistic comparison. In: Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language 2*: 211–242. Lawrence Erlbaum Associates.
- Haspelmath, Martin (2004) Coordinating constructions: An overview. In: Martin Haspelmath (ed.) (2004), 3–39.
- Haspelmath, Martin (ed.) (2004) *Coordinating constructions*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding morphology* (2nd ed.). London: Hodder Education.
- Hosoi, Hironobu (2005) Japanese *-tachi* plurals. *Proceedings of the annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* 31: 157–168. <https://journals.linguisticsociety.org/proceedings/index.php/BLS/article/view/871> [accessed March 2020]
- Iwasaki, Shoichi (2013) *Japanese* (revised edition). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Jespersen, Otto (1954[1911]) *A modern English grammar on historical principles, part II - Syntax*. London and New York: Routledge.
- Kerkeṭṭā, Khrist Pyārā (1990) *Jujhair dār (Khaṛiyā nāṭak)* [The battle field (A Kharia drama)]. Ranchi: Tribal Language Academy, Government of Bihar.
- Lyons, John (1968) *Introduction to theoretical linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McGregor, R. S. (1977[1972]) *Outline of Hindi grammar, with exercises*, 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Malchukov, Andrej (2010) Analyzing semantic maps: A multifactorial approach. *Linguistic Discovery* 8(1): 176–198.
- Malla, Kamal P. (1985) *The Newari language: a working outline*. Tokyo: Institute for the study of languages and cultures of Asia and Africa.
- Martin, Samuel E. (1992) *A reference grammar of Korean*. Rutland, Vermont and Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- Moeliono, A. M. (ed.) (1998) (edisi ketiga), *Tata Bahasa Baku bahasa Indonesia*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Moravcsik, Edith (2003) A semantic analysis of associative plurals. *Studies in Language* 27: 469–503.
- Nakanishi, Kimiko and Satoshi Tomioka (2004) Japanese plurals are exceptional. *Journal of East Asian Linguistics* 13: 113–140.
- Newman, Paul (2000) *The Hausa language: An encyclopedic reference grammar*. New Haven: Yale University Press.
- Peterson, John (2014) Figuratively speaking - number in Kharia. In: Anne Storch and Gerrit J. Dimmendaal (eds.) *Number - Constructions and semantics: Case studies from Africa, Amazonia, India and Oceania*, 77–109. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Plungian, Vladimir (1995) *Dogon*. Lincom Europa.
- Shibatani, Masayoshi (1985) Passives and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61: 821–848.
- Sikki, Muhammad, Syamsul Rijal, Abd. Rasyid, and Jemmain (1995) *Sistem perulangan bahasa Massenrempulu*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Sneddon, James Neil, Alexander Adelaar, Dwi N. Djenaar, and Michael C. Ewing (2010) *Indonesian: a comprehensive grammar* (2nd ed.). London and New York: Routledge.
- Street, John C. (1963) *Khalkba structure*. Bloomington: Indiana University Press.
- Tembine, Issiaka (1986) *Kategorial'naja sistema mladopis'mennogo jazyka (na materiale jazyka dogon)*. Unpublished doctoral dissertation, Moscow University.
- van der Tuuk, H. N. (1971) *A grammar of Toba Batak*. The Hague, Nijhoff.
- Yamaguchi, Masao (2011) Reduplication in Languages of South Sulawesi. *Asian and African Languages and Linguistics* 6: 71–88.
- Yoshioka, Noboru (2012) A reference grammar of Eastern Burushaski. Doctoral dissertation, Tokyo University of Foreign Studies. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/72148> [accessed March 2020]

執筆者連絡先：

〒 036-8560

青森県弘前市文京町 1

弘前大学人文社会科学部

e-mail: yniinaga@hirosaki-u.ac.jp

[受領日 2017 年 1 月 11 日

最終原稿受理日 2020 年 3 月 23 日]

Abstract

Non-number Values of Nominal and Pronominal Plural Forms in Yuwan in Crosslinguistic Perspective

YUTO NIINAGA

Hirosaki University

Plural forms of nouns and pronouns in Yuwan (Amami, Northern Ryukyuan) have several functions which are different from ordinary plurals. Those functions are compared with “special uses” of plural forms according to Corbett (2000: 234) in this paper. Briefly speaking, plural markers in Yuwan have the functions of *tachi* and *nado* in Standard Japanese. Crosslinguistic differences and commonalities of this kind of phenomena are analyzed by a methodology called “semantic map.” In this paper, “number values” (e.g., singular, dual, plural) are distinguished from “non-number values” (e.g., additive and associative), which makes it possible for the “special uses” of plural forms to be compared with one another on the same level. Among the special uses, “group exemplar” and “disjunctive exemplar” have not been distinguished in previous research (and both functions were sometimes called with the same label, “approximative”). In addition, plural forms in Yuwan can be used pragmatically to indicate a single referent (but they are different from so-called “polite plurals” because they do not express politeness). The function is called “negative exemplar” or “solo exemplar” in this paper, and it is also compared with other non-number values of plural forms by a semantic map.